

本分集演講

鷲尾順敬先生講述

禪宗史要

東京 鴻盟社發行



019623-000-7

13-473

禪宗史要

鷲尾 順敬 / 著

M35.6

ABG-0403



禪宗史要

目次

總論	一
第一、榮西禪師以前の禪宗	九
第二、臨濟曹洞兩宗開立の時代	一五
第三、鎌倉中心時代	二六
第四、京都中心の時代	三三
第五、地方傳播の時代	五四
第六、黃檗開立の時代	六二
第七、三宗持續の時代	六八

禪宗史要

鷺尾順敬述

總論

(文挾廣文速記)

日本の禪宗の歴史を講ずる筈であります。約束の期日が僅に一週間であるから、如何に大要でも、かゝる短期日に講じようことは大に困難であります。當に時間が十分でないばかりでない、智識も亦十分でないから、到底諸君の満足を求むることは出来ない次第であります。此點は豫め諸君にお断りしておきます。最初は禪宗の歴史のある一部分を講じ様かとも思ひました。日本佛教史の黄金時代とも云はるゝ鎌倉時代に禪宗の興隆した状況とか、日本禪宗史の中心で、尤も興味のある京都の五山が興隆した状況とか云ふ様な部分を取り出して講じ様かとも思ひましたが、いろ／＼事實が込入りても亦興味がなからうから、なるべく全体に通して大要を講ずる方がよからうとのことで、遂に不十分ながら禪宗開立の初から七百餘年に亘る沿革の大勢をザット講ずる積りでありますが、其分明でないところは、相共に研究を願いたい次第であります。

先づ初めに總論の様なことを話しましやう。日本の佛教史上で禪宗は如何様の位地を保て居るかを觀察する

ことが、最初の必要である、それは私の觀察する所では、日本の佛教史の上に於て、禪宗は大に重要な位地を保て居る、それは鎌倉時代に於ける佛教の興隆した有様より觀察しなければならぬ、佛教史の黄金時代とも云ふべき時代は奈良朝でもない、平安朝でもない、實に鎌倉時代の初期である、日本佛教史の大要を心得て居るものは十分了解してゐるであらうが、奈良朝平安朝の佛教は、現世利益の祈禱である、即ち平安朝に於ける天台眞言は共に、現世利益の祈禱で盛大を極めたものである、固より傳教大師の開かれたる天台宗并に弘法大師の開かれたる眞言宗には高尚なる教理があるのであるが、是等の宗旨が平安朝に盛大を極めた所以は、高尚なる教理に關係はない、所謂台密東密の事相で現世利益の祈禱が大流行したものである、即ち平安朝三百九十餘年間を通して佛教の勢力は現世利益の祈禱にあるので、當時の歴史に依れば大は一國から小は一身の事柄に至り吉凶禍福凡べての運命は皆祈禱で決せられて居る、夫等の事柄は佛教の歴史を見るよりも、當時の記録等を見れば明らかである、祈禱の法には息災増益と云ふ二法があつて、早魃であるとか、長く雨が降り續くとか、國に盜賊が起るとか、凡べてソノ云様な禍を除けるとか云ふ時には息災法を用いて祈禱をなす、或は立派な官位が欲しいとか何か一の望みを立てたいとか云ふ時には増益法を用ゐて祈禱すると云ふ様に、凡べて何にもかも御祈禱を熱心に遣て居たもので、當時の朝廷は護摩の烟で燻つたと云ふほどである、そこで其當時の朝廷も人民も現世利益の祈禱に依つて皆利益を求め幸福を願ふことに狂奔して居つたが、其の結果は平安朝末に於ける騷亂となつたわけであらう、平安朝末の騷亂は我國の歴史上前古未曾有の慘憺たる

修羅場を現出したもので父子相争ひ兄弟相闘ひ何とも言ふに及びざる状況である、今日までの歴史家が箇様の騷亂の由來するところを深く究明しない様であるが全く平安朝に現世利益の祈禱に心酔して相競うて富貴利達を求め様とした弊害であらうと思ふ實に恐るべき次第である、然しながら個様な状況に陥つたのが、一方より見れば鎌倉幕府の初め宗教思想の勃興した大原動力であらうと思ふ、所謂失敗の最後は成功である、平安朝の佛教は當時上下舉つて現世利益の祈禱に心酔して富貴利達を求むることに狂奔した結果がアノ修羅場を現出したといふ失敗に終つた、所が當時其慘憺たる修羅場の状況に對して大に宗教思想を發揚したのである、されば鎌倉時代の佛教の勃興した所以は平安朝末に於ける騷亂より來る所の産物である、その平安朝末の佛教の廢頽は如何と云ふに、天台は悪者の暴横に破れ眞言は愚僧の迷信に毀れた、全く平安朝の佛教は愚僧と愚僧とによりて破毀せられたのである（當時代の有様を一寸例して見ると農民などが田畑に肥料を施すよりも大般若經でも讀んで田畑を廻れば非常に能く作物が出来るなど云様なことが有つた）箇様に平安朝末程廢頽陥落した時はないが、然しながら鎌倉幕府時代程佛教が勃興した時はない、即ち鎌倉幕府の初に當て淨土禪等の新宗教が相競うて起り燦然として光明を放つた、我が國の佛教歴史上三論法相天台眞言等の宗旨が有ても、此淨土禪がなかつたならば誠に落窶たるものであらうと思ふ、是等の宗旨がないとすれば、我が國の佛教歴史上に中心主腦がないことになる、鎌倉幕府に於ける佛教は僧位僧官に依て興たものでもなく、寺格寺録に依て興たものでもない、全く信仰道念の發現に依て奮興したものである、是等の宗旨の開山は流離顛沛の間に艱難辛

苦を嘗めて自分の信仰を發揮したのである、是等の宗旨の勃興したのは、即ち我國の宗教思想の一大發達したる初めてである、それで其宗教思想の勃興した傾向を見ると二ツに分れて居る、一は客觀的發達をしたのが淨土教の形骸を以て現れて居る二は主觀的發達をしたものが禪宗の形骸を以て現れて居ると思ひます、固より佛教歴史の上より云へば淨土教が起り禪宗が傳たと云ふまでいあるが、淨土教が偶然に起り禪宗が偶然に傳つた譯ではない、其の裏面を觀察すれば我國の宗教思想が二様の形骸を以て現れたものと云ふてよからう、實際佛教歴史の研究は箇様の點に意を用ゐねばならぬものである、日本の社會の現象を考えて見ても、佛教が這入て社會の一隅に孤立してゐたのではない、日本國民の思想の中に流動浸染して種々の方面に佛教思想が入り涉たのである、夫故に佛教歴史を研究する者が、唯佛教の何宗が起り何宗が傳つたと云ふ位では研究の目的か達せられたものでない、實際國民の宗教思想が如何様の影響を受け如何様の變遷をしたか大に辯明せねばならぬので、淨土教が起り禪宗が起ると云ふ其裏面を觀察すれば我國の宗教思想の顯現發達で、一は淨土教となり他の一は禪宗となつたものと見てよい、イヤ禪宗はソナナ者でない、印度から支那日本と脈々相傳したもので日本人の頭から割出た者でないと考え人もあらうが、其れは唯書物の上の空論で實際を觀察しない話であらうと思ふ、宗教思想と云ふものは日本人の頭腦の中より發現したのである、それでなければ宗教は社會に於ける勢力とは成らない、例せば耶蘇教が日本に來たばかりでは何にも成らん、全く日本人の頭に鎔化して仕舞つて日本人の頭から出たのでなければ勢力には成らん、其れと同じく今佛教も或人の云ふ如く印度支那

から船で持て來て傳へたと云だけでは何にも成らん、日本人の思想の上に發現した所の一勢力でなければならぬ、されば全く日本人の思想の上に發現した所の一大現象と解釋して宜しい、それでなければ日本の思想の上に活動したとは云へない、個様に觀察すれば日本の佛教史に於て禪宗は大なる位地を持て居るのである、前に云ふ通り我國の宗教思想が主觀的の傾向を取て現れたものが禪宗の興隆で、客觀的の傾向を取てが現れたのである淨土教であるが、其後の變遷は如何であらう、寧ろ兩方から接近して禪宗が客觀的に淨土教が主觀的に傾ひて來た様に見えるが、これは大いに注意すべきことである、兎に角個様の工合に解釋して、日本に於ける禪宗の位地を觀察しなければならんと思ふ、

夫れから次には、日本の文明史の上に禪宗は如何なる地位を保つて居るか、是亦重要な問題である、禪宗は文學美術等の上に關係して居る所は實に著大である、それは種々の方面から種々の事實を綜合して話さねばならぬが、こゝには只重なる事實を擧げやう、先づ我國文學の上に就て言へば大躰支那かう來て居るもので全く日本文學は支那文學を離れてない、それで支那文學には唐代文學宋代文學に分つことが出来る、平安朝の文學は唐代文學で三百九十餘年の間は唐代の文學が盛であつた、唐代には支那哲學は見へない佛教の方に哲學がある、それで平安朝の支那文學は實にツマラン詩も文も盛に行はれて居るけれども、詩は唯白樂天を手本として極卑俗な詩を作て居る、彼の菅相丞などは澤山に詩を作て居るが一向興味がない様である、其他幾人も詩人はあるが何れも皆和歌を直譯した様なものである、文章と云へば對句見た様なものを拵らへて氣張つて居る

けれども、一向趣味がない、弘法大師は王昌齡の詩を持つて歸へつたが、其詩には一向其様の風が見えぬ様である、文も六朝風の文字を陳列しただけである、夫れ位であるから平安朝の文學は殆ど失敗に終て居る、其次には宋文學であるが、宋文學を傳へたのは禪僧である、即ち鎌倉の時代から室町の時代にかけて盛に文學を輸入した、それは一として禪僧の力に依らんものはない、それで禪僧は單に機械的に傳へた譯ではない、五山の僧侶は皆支那文學者である、それで五山の禪僧の詩文は大に成功して居る、支那の大家も大に驚く位である、全く平安朝の失敗に終た後に鎌倉室町時代には成功してゐる、詩でも文でも一家をなして居る者はいくらかもある、支那文學を呑込で消化したは禪僧を以て始めとす、此文學が大いに日本文學の基を成したので徳川時代に文運を開いたと云のも、全く此の五山文學が流れて出たわけである、それで徳川時代に支那文學が起らなかつたならば、今日西洋の文學が遁入しても到底消化する事は出来なかつたと思ふ、然るに容易に西洋の文學を今日消化することも出来ると云ふのも徳川時代に文運を開いて居たからである、其根本の動力と云ものは禪僧で、鎌倉室町時代に禪僧が支那文學を消化したる力である、尤もそれは禪僧が支那文學を主として弘めたと云ふ譯ではないが、それは禪宗に附帶して傳つたのでツマリ禪僧の力である、文學では詩文に係らず謠曲のごときも全く禪僧の手で成つてゐる、謠曲は支那の戯曲を翻案したもので、其初は禪僧の手に出たものである、しかし是等の事柄は一々説明する違はない、

それで我國の文學は唐代文學宋代文學と分れて、唐代文學は失敗に終り、宋代文學は大いに成功して居る、其成功の結果は徳川時代の文運を開いて居ると云ふ上から觀察すれば、日本の文明史に於て禪宗が如何なる地位を保て居るかは、事々敷説かなくとも解ることであらう、

次に話したいことは美術の上である、我國の美術は皆佛教美術である、佛教美術以外に日本の美術はないと云てもよい、而して佛教美術を二つに分つことが出来ると思ふ、即ち一は密宗(眞言宗)美術で、二は禪宗美術である、密宗美術は奈良平安朝に盛で、當時の美術は、多く佛像で密教の儀軌に依て彫刻し或は圖畫したものである、此佛像を何の爲めに彫刻し、或は圖畫したものであるかと云ふに全く祈禱の爲めである、夫故平安朝の美術は密宗美術ばかりと云てよからう、次に禪宗美術は何であるかと云ふと別に佛像には限らん、種々なる彫刻圖畫等である、密宗美術と禪宗美術とを分り易く云へば、禪宗美術は自然界に重きを置きそれから密宗美術は人事界に重きを置いた様である世間で日本は美術觀念に富んで居ると云ふが如何様の意味かと云ふに、草木に對し山水に對して自ら一種の美妙の感に打たる、が、是等は西洋人にも有るけれども、日本人は西洋人より勝て居る様である、ソコデ日本を美術國と評するが即ち車夫馬丁の様な社會まで植木鉢などを椽先に置て樂むと云ふ風が有るが、實に日本人は自然界の趣味を感じることは西洋人より余程進で居る様である、一寸月を見て何にも知らぬ者でも一句詠じたいと云ふ様な思想を持て居る、個様の美術思想は一體如何様にして養はれる者であらうか、これは固より大なる問題ではあるが、私は禪宗の感化力大に關係してゐるものと解釋してよからうと思ふ、それは平安朝時代に於ける美術品に就いて當時自然界に對して如何様の趣味を感じて居

るか云ふとを調べて見れば思ひ當ることがある、平安朝時代に於ける繪畫に山水の景は極めて少い様である、有名な山水の屏風は珍物として傳つて居る、繪卷物に山水の景があるも興味も何もない様で旅行の圖等で便宜上地理的に畫いたものである、其れて繪卷物は大半人事界のことを寫してある様である、所が鎌倉以後は自然界の繪畫が流行して草木山水を寫したものが多い、是は大いに注意すべき問題であらうと思ふ、それを今禪宗の教義の上から云へば、花に對しても月に對しても一木一草悉く法門を説くと云ふ興味があるのであるから、自然界は一々法門を説いて居る、皆生きて働らいて居るものと觀察して居る、此觀察は即ち禪宗が日本人に美術思想を發現したる一大動機であらうと思ふ、それで鎌倉時代以後に於ては禪宗の高僧で雪舟とか雪村とか云ふは盛に繪をかけたものである、一番古い所では寧ろ山などの簡単な一筆畫にも無量の趣味がある、凡べて是等の趣味ある思想を與へたは、元より日本は風景もよし氣候もよい境遇であるからであらうが、然しなから其境遇に接して個様の思想を發揮したは、禪宗が我國の思想界に與へた力が極めて大であらうと思ふ、是等は一々證據立つることが出來様と思ふ、

美術に關して説くべき事柄は澤山あらう、園景などもその一である、園景即ち庭造りは禪宗の無窓園師が始めたので、室町の時代に園景が出來たのであるも自然界に對する趣味である、平安朝時代に於ては山水に對する觀念は僅に修行の道場即ち苦行する所であると思ふてゐた位であつた、それが鎌倉以後に至て自然界に對する觀念が一變した、即ち平安朝は密宗の思想、鎌倉時代は禪宗の思想、此二の思想は自然界に對する觀念に就て

も其區別は判然分れてあると思ふ、今日日本人が西洋から美術國として稱賛せらるゝと云ふのは、最初禪宗が津々浦々迄禪宗趣味の思想を注入した結果として、日本人が自然界に對して種々の趣味を感じて來たものと判斷して宜しいと思ふ、少くとも禪宗が與へた力が極めて大であらうと思ふ、

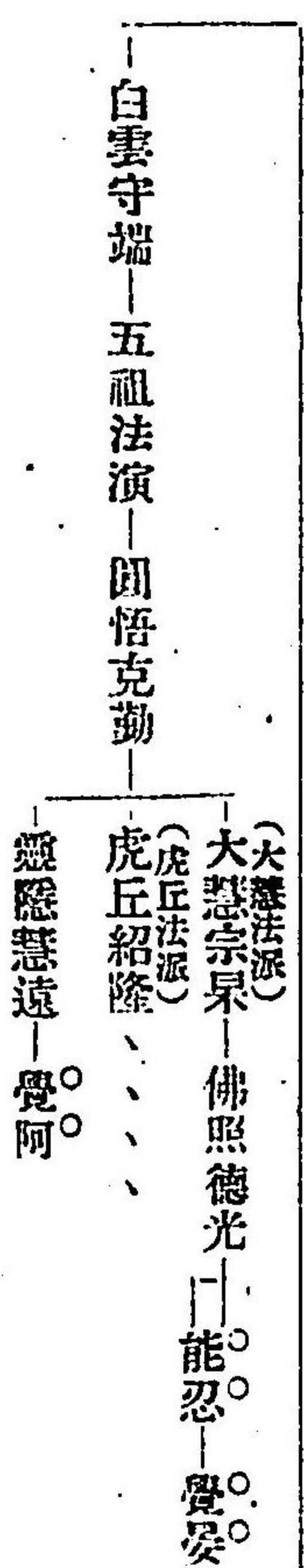
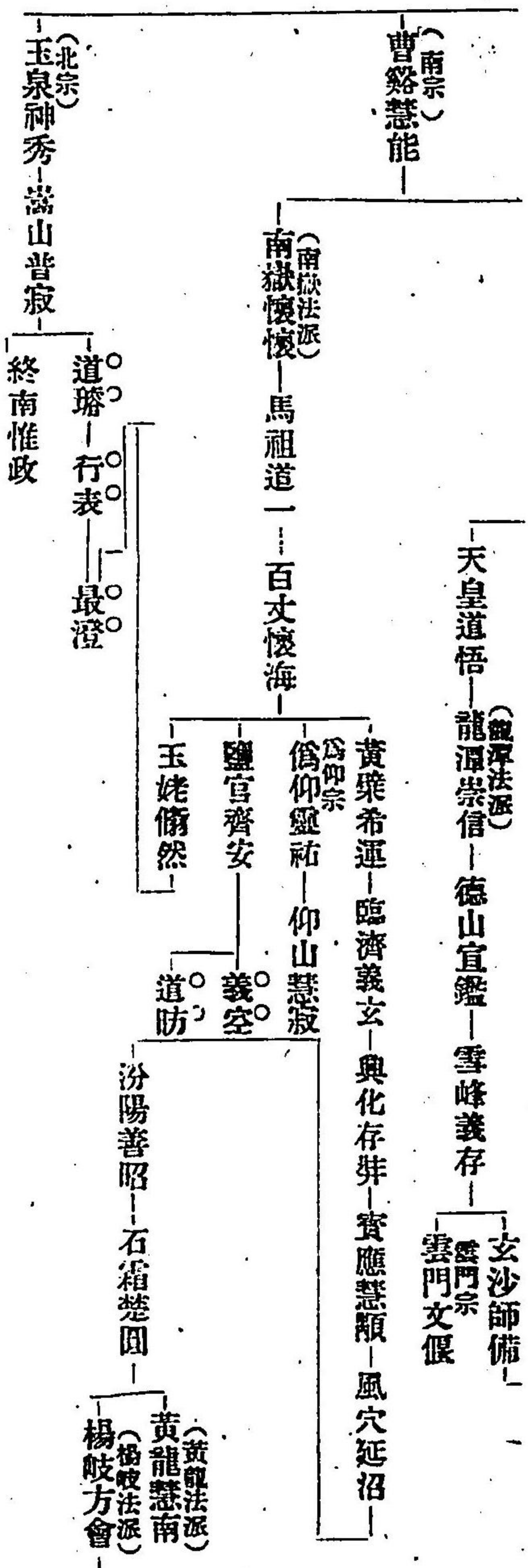
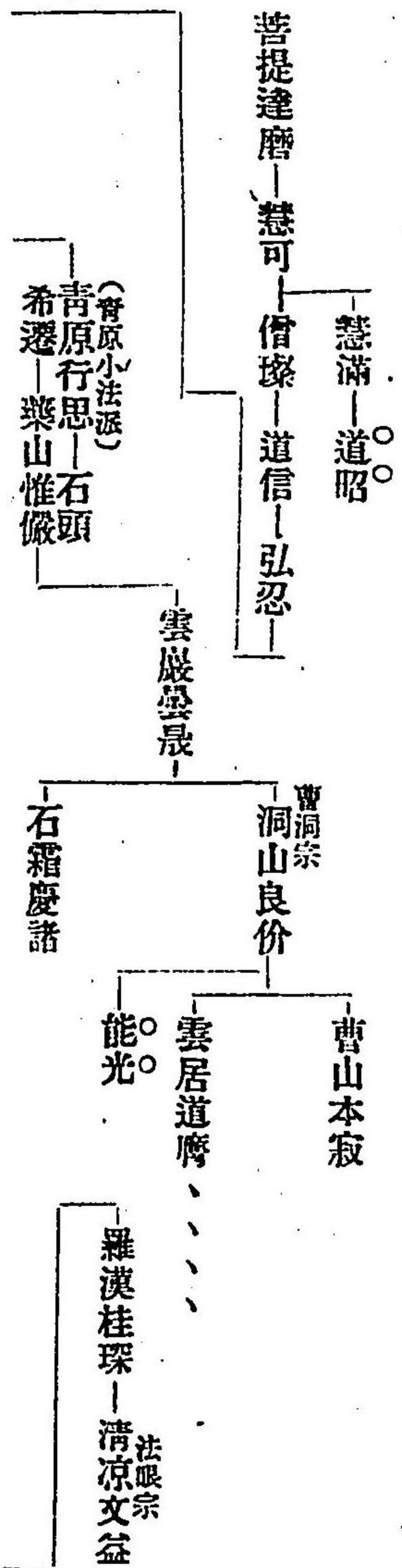
私は以上の事柄を綜合すれば、禪宗が日本の文明史の上に如何程の影響を與へたか、如何様の位地を持て居るか、それは略ぼ明了であらうと思ふ、先づ是は發端として聊か辨じた次第で、文學美術等は私の専門でないから考の至らない所があらうから猶ほ諸君の考察を願ひたい、

第一、榮西禪師以前の禪宗

これから日本禪宗の起原を説かんに、元享釋書にも開卷第一に達磨が日本へ來て禪宗を傳へたことが掲げてある、其他禪宗の書物に屢々此事が見える、即ち推古帝の二十年に菩提達磨が渡來して大和の片岡山に於て聖德太子に逢ふたと云ふとが傳つてあるが是は聖德太子が片岡山の近邊を御歩るきになつた時に一人の乞食が飢饉に迫つて居るのを御覽なされたと云ふとは事實で、日本書記にも出てある、然るに其乞食を達磨と解釋したのは道理のないとてあるが、茲に一ツ面白い話しは、達磨が支那に於て熊耳山に葬られた後門人が穴を開いて見たら棺の中に履が片方あつたと云ふとが傳にある聖德太子が片岡山にて御覽なつた乞食の事が一寸類似てゐる、乞食は死んで仕舞たので、その死骸を埋めて後數日を経て其處を發いて見たれば、死骸は無く唯が棺の中に衣服が遺つたと云ふ話である、個様な話しは牽強相附會の出來の話しで、達磨が日本へ渡來した

と云ふとは、全くそれから牽強附會した者と思ふがその起原を考えて見ると譯のない話である、この達磨が渡來したと云ふとは古く傳へてあるとで平安朝の初めに出て居る傳教大師の高弟である別當大師光定の一心戒文と云ふ書に先きの乞食は蓋し達磨ならんと云ふてある本朝文粹の藤俊生奉賀村上天皇四十御算和歌序にも見えあるその後の書物には澤山に出て居る、即ち元享釋書にも初めに出て居る、室町時代には石碑を建て、それに達磨の來歴を記し其側に寺を建て、如何にも事實らしくなつた、然し個様の次第で全く事實でない、我國に達磨の法脈を傳へられた始めは聖德太子没後四十年で後世法相宗の第一祖と仰がれてゐる道昭法師が入唐して始めて禪宗を我國に傳へ其後戒律宗天台宗の高僧が傳へて居る、平安朝には禪宗の法脈は斷續して居つた、榮西禪師の禪を傳へる前は僅かに禪宗の法脈はチラ／＼と見えて居つた位である、ソレを是から述べるつもりですが、其前に榮西禪師以前に於ける禪宗の法系を示しませう、

◎榮西禪師以前の諸師の法系



此の圖は榮西禪師以前、即ち奈良平安朝時代に於て禪宗が日本に渡つた法系を示したものである、圖に圈點を附したるは、日本人で支那に航し或は支那人で日本に渡來して傳へたことを示したのである、即ち道昭道環行表最澄義空道防能忍覺晏等々は日本に禪を傳へた人である、其中道昭は禪を日本に傳へた最初の高僧である道

昭法師の傳は委しく説くとは出来ないが、白雉四年に入唐して慈恩寺の玄奘三藏に謁して法相宗を傳へられた、然し今から考えて見ると道昭法師は豫め十分梵漢の文字に通ずる便宜も得られなかつたであらうから、法相宗の如き面倒なる學問を玄奘三藏から受けるに就ては、大變に困難で、十分に其目的を達するとは出来なかつたであらう、玄奘三藏も其考を以て禪宗を傳ふる様すゝめられたわけであらうか、其指示により相州隆化寺の慧滿禪師を訪ひ禪を傳へられた、慧滿と云ふは二祖慧可の法系で極古の達磨の曾孫に當つて居る、道昭が日本へ歸つた年代は傳はつて居らぬ、然し種々なる考證に依つて見ると、齊明帝の六年に歸朝した様に考えます、是れ即ち我國の禪宗の傳はつた初めである、それから天智帝の元年三月大和の元興寺の東南隅に禪院を建て、此處に住して禪を修して居つた、是れ禪院建立の始めてある、文武帝四年に道昭法師はその禪院に於て遷化せられた、其後道昭の傳へた禪は絶えて居つたが、次に禪宗を傳へたは道璿律師である、律師は唐の許州の産で戒律宗の高僧である、日本では戒律宗の高僧として迎へられたが、禪宗は神秀禪師の法系の普寂禪師から傳へられた、即ち北宗の禪である、道昭はまだ南北と分れぬ前に禪を傳へられたが、道璿は分れた後に傳ふるに至つた、是れは道昭法師遷化の後三十五年で天平八年に日本に渡來して傳へられた、大和の大安寺の西唐院に住して梵網經を講ぜられたが、老後は専ら禪を修して居られたと云ふのである、其時代には全く禪宗の何たるかは分らぬ位であつたのであらう、道璿律師は天平寶字四年に遷化せられた、後其門下に行表と云ふがある、此人が道璿より北宗の禪を傳へられた、是れが傳教大師最澄の師匠である、高僧傳には行表の傳は簡單で

あるが、實は大變に高德であつて傳教大師最澄は、即ち近江の國分寺に居られた時に其下に感化せられたのである、行表の傳に就ては、元亨釋書本朝高僧傳等には極めて簡單で百四十歳の長壽を保たとあるが、これは間違である、行表の次は傳教大師最澄である、最澄の事跡に就ては世に明らかである故、委しくは説くまでもないが、初め行表から禪を傳へられた、其後延暦二十三年に入唐して天台を道遠行滿に受け、真言を順曉に受け、禪を簡然に受けられた此の人、南嶽懷讓馬祖道一、百丈懷海祖々相承け懷海の下の人である、それで最澄は前後に南北兩宗共に傳へたことになつて居る、然し比叡山では圓密禪戒の四種相承と云ふが、其中の禪は北宗禪である、最澄の後慈覺大師圓仁智證大師圓珍等の高僧は皆禪宗を味つて居られた、圓仁は支那へ渡つて居士蕭慶中より禪を傳へられた、個様に比叡山に於ては世々の高僧が禪に意を用ひて居られた、殊に五大院の安然是常に坐禪をしたと傳られて居る、其次は最澄滅後十餘年にて義空か法弟道昉を率て渡來し禪を傳へられた、義空は百丈懷海の法系で鹽官齊安の高足で、始めて禪僧として日本に來たのである、これは嵯峨天皇の皇后、世に有名なる檀林皇后が深く三寶に歸依せられ、慧覺と云ふを唐に遣して高僧を請待せられたのである、慧覺は檀林皇后の令旨を奉して支那へ渡り鹽官齊安國師に謁して高僧を日本に遣して呉れと頼んだ、ソレ故に齊安國師は自分の高足義空を日本に遣すと云ふとで、此義空が檀林皇后の招聘に由て日本へ來たのである、義空は日本へ來て真言宗の東寺の西院に居つて禪を修せられ、檀林皇后に謁して禮を説かれた、其時に皇后は檀林寺を建立して請待せられた然れども其時分は前にも話した通り、現世利益の佛教の盛なる時代にして、禪宗の

事は當時の人々の頭腦には分らない、義空は暫らくその寺に住して居つたかが、どうも志を得ずして只檀林寺開山と云ふ空名を留めて支那へ歸つた故、又禪が絶えてしまつた、

義空禪師が西歸の後は禪に消息を失つたのであるが、恰も日本の延喜の頃、瓦屋能光と云ふが支那へ渡つて曹洞の禪を傳へた、これは大に注目すべきことであるが、此人は遂に日本へ歸らずして遷化せられた、それ故禪は益々絶えてしまつて、現世利益の所禪ばかり益盛大になつて居つた、其後禪を再興せられたのは覺阿である、覺阿は比叡山の學僧であつて顯密の學問を研究して居つたが、支那の佛教が盛大なるを聞いて、奮然として遠遊の志を起し、承安元年に廿九歳で弟子を伴ふて入唐せられ、杭州に至り靈隱寺の慧遠禪師に就て禪を傳へられ、印可證明を得て比叡山に歸り庵室に籠りて禪を修せられた、然るに支那に渡つたことか聞へて道俗相傳へて法を聞かうとした、それは恰も高倉天皇の時代であつて、遂に宮中に召され公卿衆の前で禪を説しとを命ぜられた、所が覺阿は法衣の袖から笛を取り出して頻りに吹いて居られた、公卿衆は何のとであるが少しも譯が分らないで、只管法を説かれんことを乞うたが、覺阿は笛を吹きながら飄然として歸つて仕舞ひ、再び外出せられなかつたと云ふことである、個様なる奇行があるが、覺阿は笛を吹く所が眞に禪の面目を説いて居たのかも知れぬ、然し其時代の公卿衆は大半暗愚であつたから個様の事は分るべき筈かない、覺阿の後は三寶寺の能忍である、この時代には餘程禪が注目されて來まして、彼處此處禪の事を口にする者がある様になつた、其時に顯れたのは大日能忍である、能忍は平氏で悪七兵衛景清の叔父なりと云ふ、顯密の教を究め殊に禪に

意を傾け、攝津の三寶寺に住して禪を修した自らその奥義を究めたと稱して居つた、然るに當時の人が三寶寺の能忍は師匠が無いと云て譏るものがあつたので遂に文治五年に支那へ弟子を遣して自分の所悟を書きて徳光禪師に呈し、證明を乞徳光禪師は大に感心して證明を附し道號法衣等を贈つた、ソレカラ大日能忍は自ら日本に於て禪を弘通するとを任し日本達磨宗と云ふ宗名を立て、三寶寺に住し日本達磨宗の開山と稱して弟子を教養しました一時門下が大に盛んであつた然るに惜いかな、能忍は其事業が出来ないで不意の災難で殺されてしまつた門下に佛地覺安と云ふがある覺安が大和の多武峯に住して、師匠の唱へた日本達磨宗の法燈を繼ぎ大に弘通に盡力せられたのである其下に懷鑿懷非懷照懷義等が出た皆覺安の門下である即ち佛地覺安が起つて以來達磨宗は大に興隆した然るに幾もなく多武峯は奈良興福時の惡僧に焼き拂はれて仕舞て覺安門下の諸弟子には四方に散亂して却て四方に禪宗を擧揚するになつた、其頃に懷鑿懷非懷義等は北國に流浪して禪を弘通して居つた是れが曹洞宗の道元禪師が後に越前に下らるゝ遠き因縁になつたわけであらう、個様の次第で北國地方に禪が弘通せられた、此際に當り榮西禪師は支那から禪を傳へて歸朝せられたけれども、榮西の事業は京都に興さふとしたのであるから、北國の方の禪は皆田舎禪と云て譏りた、榮西は自ら勅命を請ふて日本の佛法を改革しやうと云考へて禪宗を唱導した同時に一方では懷鑿は私が説きまくてもなく遂に道元禪師の衣鉢を嗣ぐに至つたわけである個様の來歴であつて禪宗の興隆したのは、突然でないことが解かる、

第二臨濟曹洞兩宗開立の時代

後鳥羽帝の朝に榮西が臨濟の法脈を傳へて以來、後嵯峨帝の末年まで五十餘年間を假に稱して臨濟曹洞開立の時代とす前にも話した通り、平安朝末の佛教は全く廢頽墮落して、結局は即ち新佛教勃興の初めとなつた次第で、其新佛教と云ふは當時の宗教思想が二つの方面に現はれたのである、即ち淨土教と禪宗とである、淨土教を主張したのは法然上人で、禪宗を唱導したのは榮西禪師である、是等の宗旨は昔しから我國に傳つてある、然し法然上人が淨土教を唱へるに就て、決して天台眞言に附帶せる淨土教を興すとは云はず、自ら善導一師に依ると云うて當時に師承する所はなかつた、所が禪宗の方は大日能忍等の様に禪を口にするものはあつたけれども、榮西禪師は日本の土地に師承する所はなかつた、自ら支那に渡りて禪を傳へたので、從來日本に唱ふる所の禪を措いて支那禪を傳へられた、これは歴史上から見れば、當時敗類極る佛教に向て、法然上人の如きは歴史上より新要素を取つたもので、榮西禪師の如きは地理上より新要素を取つたものと云はねばならぬ、法然榮西はかゝる新要素を取りて敗類墮落せる佛教界に投じ込んだものである、其後五十餘年の間は從來の舊宗天台眞言等と新宗（淨土禪日蓮等）との衝突である即ち今所謂臨濟曹洞開立時代と云ふのは舊宗新宗の衝突時代である、然らば如何に衝突し且つ衝突の結果、如何にして淨土禪等の新宗が興つたかは是れを研究せねばならぬ、今は臨濟曹洞が如何様に開立せられたか、其狀況を説かねばならぬ、先づ初めに榮西の臨濟開立の事業である、榮西は初め比叡山に登り天台眞言の學問を研究して居つたが、支那に禪宗盛なるを聞きて仁安三年に入宋して天台山上つたが此行は唯天台の章疏を齎して東歸し再び比叡山に上りて學問を勵み文治

三年に重ねて入宋せられた、是れに比叡山に於て群籍を閲覽して昔し比叡山に禪宗を傳へたと云ふとを見て、現に支那に禪の盛行してあるに思ひ合せ、支那へ渡りて禪を聞かうと云ふ考えを起された次第であらう、且つ其時には印度の方へも廻り釋迦の八塔をも瞻禮する積りであつたが、印度行きは其目的を果すことが出来なかつた、天台山の萬年寺に留り、黃龍派七世の法孫である虛庵懷徹禪師に就て禪を傳へ法信僧伽梨衣等を頂受して建久二年に歸朝せられた、これが正々堂々我國に臨濟禪の傳つた始めである、筑前の博多に留り聖福寺を開いて徐に一宗開立の經營をした、然るに其事が京都に聞へて比叡山の僧徒の怒る所となり、建久五年七月彼等の上奏により禪宗を停止せられ其後屢迫害に遭うた榮西が出家大綱を著して出家の本分を明にしたは暗に山僧の暴横を誡しめた様である、然るに其後益々山僧の憎惡する所となつたので、榮西は如何に臨濟開立の事業を企てたかと云ふことは、其の著作と行實とに依て觀察することが出来る、著作に日本佛教中興願文と云ふのがある、それに依ると、十方の諸佛諸菩薩に誓て自ら日本佛教の再興を以て任して居る、榮西は決して諸宗の一隅に禪宗を別開する考へではなく、實に日本佛教の改革を企圖して居つたのである、その願文の意味に依ると佛法衰ふれば王法も衰へ佛法が興れば王法も興る、此の二つは恰も車の兩輪の如くであるから是非とも佛教を中興せねばならんと云ふ意味である、それから興禪護國論で極力禪宗を擧揚してゐる、興禪護國論は榮西の眞作でないといふ説もあるが榮西の言行の上から考へても個様の意見を持つてゐたとは確實であつて其眞作か否かを問ふ必要もなからうと思ふ一部の主意は佛法王法相關論でその所謂佛法は禪宗である佛

教の總府である禪を興すは即ち佛法を興すので、決して諸宗の間に一禪宗を別開するのでないと思ふ考で、盛に京都に於て主張した、然るに益々天台の山僧の反抗が激しくなつて、遂に榮西は京都に居ることの出来ないで、鎌倉に逃げて來て時の將軍頼家に依て、日本佛教の中興事業を果さうと思ふた、然るに鎌倉では頼家を始め禪と云ふとは少しも解らない、只入唐した高僧として尊敬をして居つた、正治元年九月初めて幕府の請を受けて不動尊供養の導師を勤められたことが見える榮西が鎌倉に於て歸依を受けたのは禪ではなくして祈禱であつたからである祈禱と云へば榮西は台密事相に通し葉上流を開いたほどである如實尼即ち政子は大に歸依して義朝の舊跡龜ヶ谷に壽福寺を建立して榮西を迎へた然し禪を聞くためではなく、矢張り祈禱供養のためである榮西の傳に依れば頼家が榮西に歸依して其本願で建仁二年に京都加茂川の岸に一大禪苑を建立し建仁寺と稱したとあるがそれは稍後の事であらう當時比叡山の下で其様の盛典が擧げらるゝ事情でない、且つ帝王編年紀に引用してある建仁寺の緣起に見ゆる様の次第ならば吾妻鑑に見えぬ筈はない建仁寺の建立は後年の事であらう此事は尙ほ其宗門の學者の考を伺ひたいです、それで前説した様な狀況で榮西禪師の禪宗興隆の事業は成就するに至らなかつた、即ち日本佛教中興願文與禪護國論の主意は事實にならなかつた建保元年榮西は自ら幕府に出頭して大師號の宣下を請ふた、是れは幕府に於ても一旦歸依したものであるから執奏したといけれども、生前に大師宣下の例がないから遂に却下せられた、其後權僧正の僧官を請ふて漸く許された是等は事實であるが全く舊宗なる天台眞言等に對抗するに就いて勢力を作らうとし地位を得んとせられたのであ

る一方から見れば如何にも俗悪な様であるが當時對抗するに就ては止むを得なかつた次第である實に榮西は天台眞言等の妨害に對して如何に苦悶したかを知るに足るので換言すれば外的勢力を借りて天台眞言に對抗し様としたのである、然るに其事業は成就するに至らないで、建保三年六月五日壽福寺に於て遷化せられた、榮西の傳には建保三年七月に京都で遷化した様にあるは事實でない尤も後建仁寺へ遺骨を分つたことは事實である、是等の事實を綜合して考へて見ると榮西は全く苦悶の間に遷化せられたものである、個様に事業の成就するに至らなかつた譯は、全く天台眞言の勢力に對抗して勢力を得様としたからである、天台眞言等の國家的佛教の後を繼て矢張り國家的佛教として立たうとしたからである舊宗たる天台眞言の方では自分の位地を奪ひ取らるゝ様な心地で、極力榮西の事業を妨害し遂に鎌倉へ追拂つたのである、それで榮西は舊宗たる天台眞言に壓迫せられて事業も成就せず遷化せられたのである、是れ實に榮西が正面から舊宗に對抗したからであらう、かくして榮西は遷化せられたが、其事業は全く弟子に附屬して置かれたのである、其重なる弟子は榮朝行勇明全の三人で榮朝は上野世良田の長樂寺に行勇は鎌倉の壽福寺に居り、明全は京都の東山に居つた、榮西禪師遷化の後に於て、三人の弟子で二人は關東に居られ、一人は關西に居られた、榮朝の下には澤山の弟子があつて、榮朝が世良田の長樂寺に於て禪を鼓吹して居られた時には、皆京都から下て來て、禪を學んだと云ふのである、それ故榮西遷化の後、榮朝行勇の二人の弟子は關東に居りて、京都へは上らなかつたので、京都は榮西滅後、益々舊宗の勢力は盛であつて、此二人が上京したところで到底天台眞言に對して、自家の

一門を開くことは難いので、關東の野に潜んで熱心に禪を修して居られた、然るに其の高風を聞きて京都地方に學問を修めて居た人々が陸續關東に下りて、榮朝行勇を訪ふて禪を學んだが、遂に其下から辨圓の如き普門の如き榮尊の如き覺心の如き一方の大禪徳を出す様になる、これに反して京都に於ける榮西の門下は實に微々たるもので東山の草庵に明全が居られたけれども、誰れ一人訪ふものもない状況であつて京都は昔にかはらず、舊宗たる天台眞言の天地である、然るに個様の場合に出られたのが道元禪師である、是れから曹洞宗の開立に及ぶのである、

我國禪宗史の上から觀れば、臨濟禪を傳へた榮西禪師は、草創したもので、曹洞禪を傳へた道元禪師は、守成した様である、榮西は圓密禪の三宗を兼ね傳へて、禪はその中の一であつた、固より榮西の本意は禪を興隆するにあつたが、當時未だ時運が開けないから、専ら禪を主張するに足らなかつた、然るに道元禪師に至つて、全く支那の禪の宗風を傳持した、禪師が曹洞禪を傳へて、始めて我國の禪の宗風が整備したは事實である、

道元禪師の事蹟は、委しく説く必要もなからうが、その始めて禪に意を傾けられしは、親年の頃である、最初榮西禪師に教を受けられた様にも傳へる、は實は如何であらう、假令直接に教を受けられたとがあるとしても極めて短い間の事である、榮西の寂せられて後、明全禪師の教を受けられた、此事は、道元が自ら言うて居られるが、その言によれば、明全が大徳であつたことも解る、略ぼ十年ばかりも教を受けてゐられた様であ

るが、榮西禪師寂せられた後、明全も京都では手足を伸ばすことが出来ぬ様の事情であつて、遂に榮西禪師の往跡を追うて宋に渡らうとした様である、貞應元年に明全道元等相携へて筑前博多から出發し、宋に渡り天童山、徑山、阿育王山等に登り、諸禪徳を歴訪したが、不幸にも明全は疾に罹つて天童山で客死せられ、其後道元禪師は、天童山の長翁如淨師に師事して、佛々祖々面授の大事を豁悟し、所謂正法眼藏の付屬を受け、明全の白骨を負ふて東歸せられた、個様の次第であるから、始終榮西禪師の弟子明全禪師から教を受けて居られた、然し曹洞禪の系統に關係はない、道元禪師の東歸せられたは安貞元年である、一たび京都に上り榮西の遺跡に留まられたが、京都で門戸を構へやうと云ふ様の考はなく、靜修を事として居られたが、其状況は全く榮西禪師が東歸後の状況に異つて居る、

寛喜二年の頃京都を出て、深草に幽棲せられた、深草は、唯留一事醒猶記、深草閑居夜雨聲、と云へる有名な作のあつた所で、靜修を事としてゐられたとが解る、深草の幽棲三年を経て、天福元年に興聖寺を開き、嘉禎元年に同寺に於て開堂を行はれた、これが我國で支那の禪宗の法通りに禪牀を設けて、禪を修した始めであるから、興聖寺は曹洞宗最初の寺であるばかりでない、始めて禪が行はれた寺である、その前後に門下漸く盛つて、懷辨、詮慧、義尹、等の教を受けてゐた、懷辨は、首座に擧げられて一門の諸弟子を監督して居たやうにある、

臨濟、曹洞、二宗の開立の状況は、大に相違してゐるは、時勢の變遷もあるが、開祖の二禪師の行業が相異

してゐる、臨濟宗の開立に關しては榮西禪師は、勅許を蒙らねばならぬと云ふことで苦心せられたが、道元禪師は、其様の事には、一向意を留めなかつた、辨道話の中に、次の意味の言がある、靈山會上に於て、既に國王は、佛陀の勅命を受けて居るから、今日縁に任せて佛法を弘通すれば、其國の王は、佛法護持の任がある、今日改めて勅命を待つて、一宗開立するまでもない、個様の見識を持つておられた、大に味うべき言であらふと思ふ、

其後興聖寺の叢林は、益盛になるに隨ひ、自然内外の意を引く様になり、比叡山の僧徒の目にも附く様になつたから、俗悪なる煩累の出來るとを恐れられたわけでもあらうが、その寛元二年に驟然として、同寺を出で越前に向はれた、これは、彼多野義重と云ふもの、請待もあつたからであるが、禪師が常に京都に隔りたる地に、山林泉石の便宜を求めて靜修を事とせやうと云ふ考に投じたから、喜んで請待に應ぜられたとは、事實である、道元禪師が、北國に於ける法化は、これより始り、永平寺の開堂を行はるゝに至り、京、鎌倉、に對し禪宗一方の中心となるわけである、

それから越前に於ける、道元禪師は、益禪師の面目が、窺はるゝ様である、實治元年の事である、鎌倉の北條時頼より強請せられて鎌倉に出で、時頼以下諸人のために、法門を説き且つ菩薩戒を授けられたが、道俗の歸仰するもの、群をなしたと云ふことである、時頼等が抑留したけれども、越前の小院にも檀那があつて、小僧の齋孟を充たすに十分であるからと云ひ、袂を拂ふて歸られた、その時の詩に、今日歸山雲氣喜、愛

山之愛甚於初と云ふ句がある、實際禪師が落々たる心情を吐露せられたものであらう、其高潔なるは、兎角個様の風であります、然るに、時頼は越前の土地二千石を寄進して衣資の供すとて、禪師の弟子玄明と云ふ者に寄進狀を渡しましたから、玄明は大に喜んで、早速寄進狀を禪師に呈しましたが、道元禪師は、固く辭して受けられなかつた、禪師が平素の心情から考へても、個様の寄進狀を受けられやう筈はないか、玄明は、全く禪師の平素を熟知しなかつたわけであらう、禪師は、寄進狀を受けられなかつたばかりでない、玄明が、大に喜んだと云ふことを聞いて、その卑陋を惡まれ、我弟子でないとして、玄明を叱し下山を命せられました、下山を命せると云ふは、破門せられたとて、玄明の耻辱は、この上ないものである、遂に玄明が、出てから後、その禪牀を毀ち、禪牀の下の土まで、堀り取つて捨てられたと云ふのである、これは一門の諸弟子を盤醒せられたものであらうが、其嚴峻なる處置は、實に驚くばかりである、また個様の事柄もある、後嵯峨天皇が、勅召したまふたか、固く辭して出られなかつた、後紫衣を賜ふた、一たび拜受せられたけれども、畢生これを着用せられなかつた、其時の詩で、永平雖谷淺云々は諸君かよく承知の事であらう、是等の行實は、榮西禪師に比較すれば如何であらう、榮西か、自ら大師號の宣下を請ひ、權僧正の官を求められた事とは、全く黑白の相異であるは、事々しく言ふまでもない、

榮西 道元、の二禪師が、我國の佛教を中興せやうとの考は、共に同様である、榮西も諸宗の一隅に、臨濟宗を開かうと云ふ考でなかつた、道元禪師も然うて、諸宗の一隅に、曹洞宗を開かうと云ふ様の考でなかつ

た、然し前後二禪師が、佛教中興の事業を擧ぐる順序等は、全く相異してゐるは、大に研究せねばなりぬところであらう、個様の相異なるからと云ふて、一に榮西禪師を抑へ、道元禪師を揚ぐる様の事は、事實を誤るであらう、輕卒に抑揚褒貶を下する様の事は、斷じて悪い、第一に時勢の變遷を觀察せねばならぬ、榮西禪師が臨濟禪を傳へてから、道元禪師が曹洞禪を傳ふるまで、僅に三十七年であるが、年間は平安朝から鎌倉時代に遷つる交替時期であるから、大に時勢の變遷がある、これを十分觀察せねばならぬ、要するに榮西禪師は、平安朝の國家佛教の後を繼がうとしたもので、外的勢力を藉らうとして、榮西禪師の一舉一動は、皆此主意から出てゐる様であつて、其事業の出來上らなかつた理由も、全くこゝにある、そこは前に説いた通りである、然るに、道元禪師は、最初から國家的佛教の後を繼がうとはしないで、個人的佛教を興さうとした、然うであるから、外的勢力を藉らうとしなかつたばかりでなく、極力外的勢力となる様なものを排し、専ら内的勢力を積うとした、道元禪師の一舉一動は、皆此主意から出て居る様である、所謂鎌倉佛教の面目は、此個人的佛教にあると思ふが、道元親鸞は、これが主張に心力を盡したものである、それで榮西、道元、の行實事業を比較對照すれば、當時の佛教界に於ける、思想の變遷を見ることが出来るもので、漸次に新面目が顯れ出てゐるとが解る、今は國家的佛教、個人的佛教、の是非如何を論ずる必要はないが、平安朝の國家的佛教の弊害が百出して、鎌倉時代の個人的佛教が顯れ出たは、一大革新である、それで佛教史の一部である、禪宗史の上に、其大革新事業の順序が示されてゐるものと見ねばならぬ、實際然うである、

當時京都の禪宗の形勢は、如何であつたか、これを説かねばならぬ、京都は、平安朝以來の佛教の中心地であるから、所謂平安佛教である天台、眞言、の勢力は尙ほ持續してゐる、それ故榮西禪師も道元禪師も、十分手足をのびずとが出来ない、前に榮西は、鎌倉に逃れ去り、後に道元は、越前に隠れて仕舞はれたから、永く、禪宗興隆の時期かない様であるが、實は然うでない、所謂平安佛教である天台、眞言、の勢力は尙ほ持續してゐると云ふもの、佛教界は、一大革新の時期は益迫つてゐるから、鎌倉佛教である禪宗が興隆は、寧ろ自然の形勢が要求してゐる様な次第である、個様の場合に京都に上つて、京都の佛教界を震動し、大に禪宗を擧揚した大徳がある、それは誰れであらう、諸君は略ぼ承知のことであらうか、即ち臨濟宗の聖一國師辨圓である、これから其興隆事業を説かう、

前説いた様に、榮西禪師の寂せられた後、東國には榮朝、行勇、の二禪師が門戸を構へてゐられて、其下に俊才が群をなした、辨圓は其中の一人である、後、宋に渡り、徑山の無準師範禪師、の法嗣となり、仁治二年に東歸し、まづ西海の諸國に禪宗を擧揚し、寛元の初の頃京都に上つた、これは九條道家の請待に由るわけ、辨圓は西海の諸國を風靡した勢力を負うて京都に上り、九條家の別荘に這入り、其別荘で法門を説いてゐた、初めから個様の次第で大に内外道俗の意を引いたが、道家の本願で普門寺、東福寺、を開く様になつて、大なる勢力を張るとなつたは、驚くばかりである、東福寺は、東大、興福、二大寺の一字づゝを取つて號したと云ふが、これで其規模も略察せられますはありませぬが、辨圓禪師は、東福寺開山となり、日

本國惣講師と云ふ號を得、同寺を八宗兼學の道場と云て、禪宗を擧揚する様になつたが、忽ち京都の佛教界の形勢は、一變して其中心は、東福寺に遷つた様に見える、

元來辨圓禪師は大變に活潑磊落の人であつた、學問は該博で、教、禪、に兼通し、辯論に達してゐた、諸宗の學僧は、一たび會見すれば皆舌を捲いて驚いた様である、勅命により宮中で宗鏡録を講せられた時、南北の學僧は、席に列つたが一言も發する勇氣がなかつた様である、辨圓禪師が南北の學僧に對せられた狀況は、一二の問答で察せらる、まづ俱舍、法相、等の學に關して詰問し其窮するを見て、教か解らない様では、禪が解らうはづがないと、一言の下に伏せられた様である、儒家某の問答がある、拙僧は釋迦牟尼佛から四十五代目であるが、貴下は孔子から何代目であると言はれたが、儒家某は、何の言もなく窮したと云ふことである、個様の次第で、禪師に敵對するものがなかつた様であるが、今一々話しては限りがない、

要するに京都禪宗は、辨圓禪師によつて興つた、榮西禪師の後、臨濟宗第二の開祖と謂うてよからう、

第三、鎌倉中心の時代

第二期鎌倉中心の時代は、即ち鎌倉の五山が興隆した時代で、後深草天皇の初から、花園天皇の末に至る、七十餘年の間を假りに稱したものである、

最初に五山と云ふとに就て、一言せねばならぬ、これは全く宋の官寺の例に倣ふたもので、宋に教の五山、禪の五山、と云ふものを置いた、其の禪の五山に倣ふて我が國に初めて五山と云ふ稱を用ゐた、その何年頃であ

るか詳かでないが、宋より陸續禪僧が渡來して、京、鎌倉、に留住する様になり、五山の稱も出づることになつたものであらう、五山と云ふは、五個の寺と云ふ意義ではない、一つの格式である、初めは鎌倉の五山、京の五山と分れて居たものでない、京、鎌倉の諸大寺を合せ稱したものである、第一は建長、南禪、第二は圓覺、天龍、第三は壽福、第四は建仁、第五は東福である、初の第一第二は二個づゝであるが、是は同格である、それから五山の下に准五山と云ふがある、即ち淨智、淨妙、萬壽等である、後には建仁、東福、萬壽、建長、圓覺を五山と稱する様になりた、此の順序を見れば、鎌倉の建長、圓覺は下位に置かれてある、京都の諸禪刹が盛大に成るに従ふて、天龍、相國の新たに五山に列せらるゝとなつて、終に建長、圓覺は五山の列を除かるゝこととなり、初めて鎌倉五山の稱が出来て、京の五山と對立する様になつた、鎌倉五山は第一建長、第二圓覺、第三壽福、第四淨智、第五淨妙である、京都にては五山の上に南禪寺を置た、これは亦宋の天界寺の例に倣ふたものである、京の五山は第一天龍、第二相國、第三建仁、第四東禪、第五萬壽と云次第である、此の五山の位次は屢々變更して、位次を定めるについて大に争ふたことも、先づ五山と云へば京の方を重に云ふのである、五山文學と云へば必らず京都の方を云ふのである、今鎌倉中心の時代、即ち鎌倉の五山が興隆したる時代は、尙ほ京、鎌倉の諸禪刹を合せて五山と稱する時代である、此の時代に鎌倉に禪宗の中心があつた、

我國の政治の中心地は、常に佛教の中心となつて居る、平安朝以來京都が中心地であつた、然るに鎌倉幕府

が起りて政治の中心が東遷するに従つて、佛教の中心と同じく鎌倉に遷て來た、所謂鎌倉佛教の新宗は、皆東國に興つたものである、親鸞上人、日蓮上人等皆東國に入て、共に一門を開立せられたのである、それで禪宗は興隆の初め東西に分れて居たが、其中心は全く鎌倉にあつて、東國に興つたは事實である、辨圓禪師が京都に上つて、京都の佛教界を震動してから、禪宗は一たび京都に興隆したが、其實京都よりは當時政治上の中心である、鎌倉の方が興隆するに大に便宜があつた、京都を中心としたる平安朝以來の佛教、即ち公卿の勢力に依りたる天台、真言等は、政治の権力が全く鎌倉幕府に遷るに従て、大に其影響を受けた、次には武家の勢力に依つて興つたものが禪宗である、然れば辨圓以來京都に禪宗が興た同時に、鎌倉に禪宗が興り、東西相對して盛大になりたけれども、實際政治の中心である鎌倉は、禪宗興隆の中心であつて、執權北條氏の歸依で盛大を極めた、

鎌倉五山興隆の時代は、如何なる状況であつたかと云ふと、寛喜四年に宋の道隆禪師が弟子數人を率ゐて我國に渡來し、翌寶治元年に京都を経て、鎌倉に下つたが、是が鎌倉禪風興隆の端緒を開いたのである、道隆の西來に就ては、當時種々なる風種があつた、支那では宋末元初の時代であつて、元が新に興て四方に勢威を張らうとして畫策經營してある時であるから、禪僧を日本へ送つたのは、元の密使であらうと云ふと疑れた、それ故に道隆が流説のため、一たび鎌倉を放逐されたが、後其嫌疑も晴れて、鎌倉に歸り北條時頼に歸依せられ、建長寺を開くとになつた、其後普寧、正念、子曇等の高僧が陸續渡來して鎌倉に於て禪を擧揚し

た、正念は北條師時に迎へられて淨智寺を開いた、それは文永五年の事である、此等の高僧は皆宋末の衰運を見るに忍びず、騷亂を避けて來たので、いづれも皆北條氏の尊敬を受けて、鎌倉に住して居られた、而して弘安元年に、道隆は遷化せられて勅命で大覺禪師と云ふ禪師號を賜つた、これは日本に於て勅證禪師號の初めである、同年に子曇は西歸した、個様の次第で建長寺の法席は空しくなつたが、時宗が特に支那に使を發して高德を請待するとなり、弘安三年に祖元禪師が覺圓等を率ゐて渡來した、禪元は支那に於て一世の大徳として仰がれたが、鎌倉に入りて大に支那禪を鼓吹し、弘安五年に圓覺寺を開くことになり、これより壽福、淨妙、淨智、建長、圓覺の諸禪刹所謂五山薨をならべて壯觀を呈した、正安元年には一寧、仁泰等渡來し、子曇も再び渡來し前後に鎌倉に入りて諸寺に住し、丁度支那人の居留地が出来た、一方から見れば支那では宋が滅び、日本で一の宋の國が開かれた様な状況であつた、元からは我國の内情を探る爲めに僧徒を遣はしたともある、即ち一寧は其一人である、それで此事は北條氏も能く知て居て、只尊敬して法門を談ずるばかりで、少しも政治上の意味のない様に取り扱つて居た、政治上の意味を帯びて來たものに對しては、北條氏は上手に尊敬して居たと云ふとは事實である、然し一寧は鎌倉の地を拂はれたともある、それで個様な事實を論じて居る學者もある、頼山陽の如きはまゝ、皮肉の言を放つてゐる、即ち當時支那から、日本の内情を探らんとして、僧徒を遣はしたが、其渡來した禪僧をば支那へ歸さずに、専ら尊敬歸依し大いな寺院を建立して迎へたは、畢竟一種の牢獄に入れて監督した様なもので、北條氏の巧妙な手段であつた、即ち北

條氏の政治上の策畧である、固より禪宗に意を傾けて居つた譯ではないと云ふてゐる、然し此等の議論は、酷に過ぎてゐる、北條氏が禪宗に意を傾けて居つたと云ふとは、事實であつて必ずしも政略ではない、幾分か其の意味もあつたかも知れぬが、建長、圓覺等の建立まで、政治上の策畧に基くと云ふとは事實を誤てゐる、時頼の如きは道隆、普寧に師事して實際禪の興味を解して居つた様である、彼の業鏡高懸三十七年、一槌打碎大道坦然、と云ふ遺偈などを見ても解るが、其命終の状は禪僧の遷化するに於てはならない様であつた、然し支那の禪僧が鎌倉に集まつて、一時支那禪を鼓吹し、北條氏に支那風の一種の感化を與へたとは事實である、北條氏が人民を愛撫し、政治に心力を盡したと同時に、朝廷に對して敬禮を失うてゐたとは、誰も知つて居るが、此等は支那風の一種の感化であらう、其大弊害は遂に古來例のない臣子の分限を忘れて、天皇を絶海の孤島に放流するに至つた、個様な事柄は支那に於ては平氣である、北條氏が個様の暴横を斷行したは、日本思想でなく、支那思想を受けて居ると云ふはねばならぬ、即ち鎌倉が開けて以來、支那風一種の感化を與へたと云ふことは、如何にも事實であると思ふ、然るに又山陽が個様な議論を吐いて居る、即ち北條氏修禪學論を作つて、大に禪宗を罵倒してゐる、悪い事は決して恐な者がする譯ではない、非常な悪い事は、非常に賢い者が行ふのである、非常な悪い事をするのは、必ず心中に固く執る所即ち一種の信する所があつて、斷行する者である、北條氏が固く執り信じて居るものは何かと云ふに、禪宗である、其禪宗の上から、人間世界の事柄を全く夢の様なものであると考へ、所謂一大平等觀で君臣の分、父子の分等に重きを置

かぬ事になつて、暴横も斷行したわけだ、確かに禪宗の與へた思想であると思ふて居る、諸君も承知のとであらう、北條氏修禪學論に就て大いに反駁を加へた人がある、それは前圓覺寺の洪川禪師である、然し其反駁は、要するに山陽を叱咤したばかりで、歴史上の事實もなにも擧げないから、正當な議論にはならない、山陽は、北條氏は禪に歸依したものでない、只政治上の策略から、支那の禪僧を尊敬したのであると云ふがら、北條氏九代の擧動は、禪の感化であると云ふは、前後撞着して居る、私の考へでは、前に言ふた様に支那風の一種の感化に基いたもので、即ち外國思想の影響であつて、禪宗の關する所ではない、丁度佛教が初めて我國へ渡來した時に、外國思想の影響で、一たび國家の秩序を害した様で、其形勢は同様である、然し後には禪宗にも、恐るべき弊害があつたとは、弘長記等に見えてゐるが、山陽の議論は禪宗を排撃するものであるから、一言辯明してあげねばならぬ、

然し鎌倉幕府の初めから、支那の交通が開け、陸續宋の禪僧が渡來して、漸く支那文學が盛に興つたと云ふとは事實で、幾分の弊害があつても、當時支那文學が我國の文明を助長した功績は、著大なるもので、全く禪宗に附帶した賜である、即ち一寧の下に出た友梅の如きは、實に一代の大家である、慧廣、靜照、師練、圓旨、元光等の諸禪師は皆詩文に長じてゐた、是等の大家が輩出して、平安朝以來の文學界を一變して、所謂五山文學の新局面を呈する様になつたとは等閑に附してはならぬ、

當時京都の禪風は如何であるかと云ふに、京都とは、龜山、伏見の二上皇が深く禪に意を傾けたまひ、常に

覺心、普門、紹明等の諸高僧を請じたまうた、辨圓禪師以後是等の諸高僧があつて、京都の禪風は支持せられてゐた、辨圓禪師の門下は益榮へて、高僧が雲の様に群出し、覺心、普門は共に元榮朝禪師の下で、辨圓の同學であつたが、辨圓が宋から歸へり京都に上つた後、相尋て宋に渡つて諸高僧を歴訊し、東歸の後は共に京都に上り、辨圓禪師が禪宗興隆の事業を受けて、一方ならぬ心力を盡した、就中普門は辨圓の學徳に服し、師資の禮を執り其法を嗣ぐこととなつたが、辨圓禪師が寂して後、龜山上皇の御歸依で、南禪寺を開いた、此事は正應三年である、覺心、普門の京都に聞ゆる時に、南浦紹明禪師が一方に興つたが、禪師は第二の辨圓禪師の様で、大に京都の禪風を擧揚した、初は建長寺の道隆の門下に學んだが、後宋に渡り九年の間の留學の功を畢へ、徑山の虛堂智愚禪師の法を嗣いで東歸し、京都に上りて伏見上皇の御歸依で、宮中に禪を談じ、勅願により嘉元禪院を開いた、鎌倉から北條貞時に強請せられ、建長寺に住したともある、一時京、鎌倉に往來して朝野の尊仰を、一身にあつめてゐた様である、門下に鏡圓、妙超の二傑が出て益京都の禪風の大勢力となつた、その事實は次下に説明するはづである、

曹洞の禪風は如何であつたかと云ふに、北國に本據を占めて懷辨、義价等の諸高僧が居られたが、共に京都に上らうとはしなかつた、西國に義尹禪師が居つて、遙かに東西相呼應してゐる状況にあつた、義尹は當時比類ない大徳で、二度まで宋に渡り、學徳並に高く尊へてゐるが、弘安六年に肥後に大慈寺を開いて留住した、龜山上皇の御歸依を受け、特に紫の僧伽梨を賜ふたと云ふが、亦京都に上つて其門口を構へ様とはしな

かつた、是等は皆道元禪師の遺風であらうが、かゝる次第で、曹洞は未だはなほしい大勢力を成しておらぬ、

第四、京都中心の時代

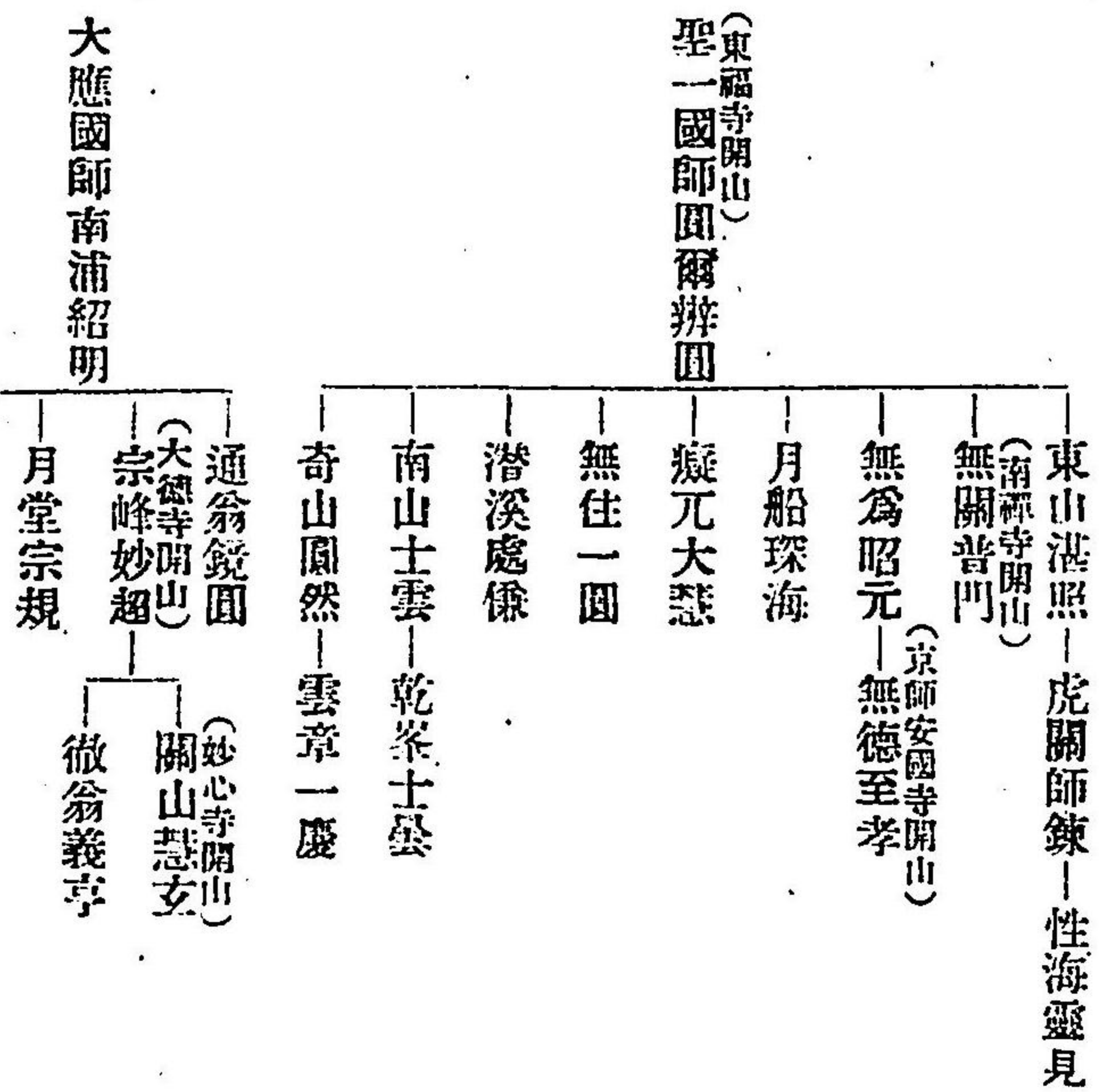
これより、進んで京都中心の時代を話さう、京都中心の時代は、臨濟曹洞が對立して極盛の域に至つた時代であつて、禪宗史の黄金時代と謂はる、時代であらう、後醍醐天皇の朝の初から、南北朝を貫いて、稱光天皇の朝の應仁の末まで一百餘年の間である、此間に臨濟曹洞の對立して極盛の域に至つたが、二宗の風は大に異つてゐる、前に話した様に、開祖の初から異つてゐる次第であるが、宗風が異つて且つ傳播の領域が異つてゐる、臨濟は鎌倉から京都へ中心が遷つて、京都の五山が榮へたが、所謂興禪護國の主意で、政治上の權力に附隨して勢力を張つた、曹洞は北國が中心で、漸次に諸國に傳播して大いに勢力を張つたが、然しド、コまでも内的勢力を積まうとした者である、個様の次第であるから、臨濟の状況は如何にも目立つて華々敷いが、曹洞は然うでない、全く宗風が異なるからである、それで今京都中心の時代と云ふは、重もに後醍醐天皇の御歸依で同天皇以來、臨濟の京都に興つた形勢から謂ふわけであるが、後醍醐天皇の御歸依で、曹洞が興つたことも事實である、二宗が對立して極盛の域に至つた、然しその宗風が異り領域が異うから、一方は目立て華々敷く、他の一方は然うでない、禪宗史の上から觀れば、個様の相異は自然の妙配合である、第三期の末幕府が衰微した際、政治上の權力に附隨してゐた臨濟は、大に衰微したが、曹洞は益諸國に傳播興

隆した、始終二宗の形勢が異つてゐるは自然の妙配合であらう、仔細に観察すれば大に興味があるのである。

前に申した通りに、禪宗は東西相對して興つたが、其主なる勢力は東にあつた、鎌倉にあつた支那の歸化僧が本陣を構へてゐる建長圓覺等の隆盛は言ふまでもない、京都の諸禪刹は常に鎌倉から住持を招聘してゐた、然るに鎌倉の勢力は、漸次に西遷して京都へ上つて、遂に京都中心の時代が開かるゝことになる、第二期に於ける京都の禪宗は、畢竟第三期の前置である、第二期の末から漸次に勢力が西遷した、第三期は其結果である、鎌倉の禪宗の勢力が京都に上つて、京都で興隆したものである、第二期以來鎌倉禪、京都禪の二様の風があつて、鎌倉禪は支那禪で、京都禪は日本禪である、日本禪と云ふは國家佛教の思想を受けてゐる意義である、然るに鎌倉の禪宗の勢力が西遷して京都に上り、京都で興隆する様になつて、自ら二様の禪風は合同した様である、鎌倉の禪宗の勢力が西遷してから、第三期京都中心の時代が開かれたは事實であるが、京都は鎌倉禪である支那禪の弊害を受けなかつたであらうか、支那禪の弊害と云ふは誤解するともあらう、支那禪に附帶してゐる支那思想は、政治社會の上に影響を與へた様である、南北兩朝の分立は公武の對立であらうが、前に鎌倉幕府の一部を感化した支那思想は、室町幕府を感化した様である、南北兩朝の時に、北朝が常に禪宗を重じた様であるが、是等の事實は大に研究せねばならぬ、要するに鎌倉の禪宗の勢力が西遷して京都に上り、其結果京都中心の時代が開かれたは事實で、京都の宗教、政治、社會の上に大なる影響を與へたも亦事實である、

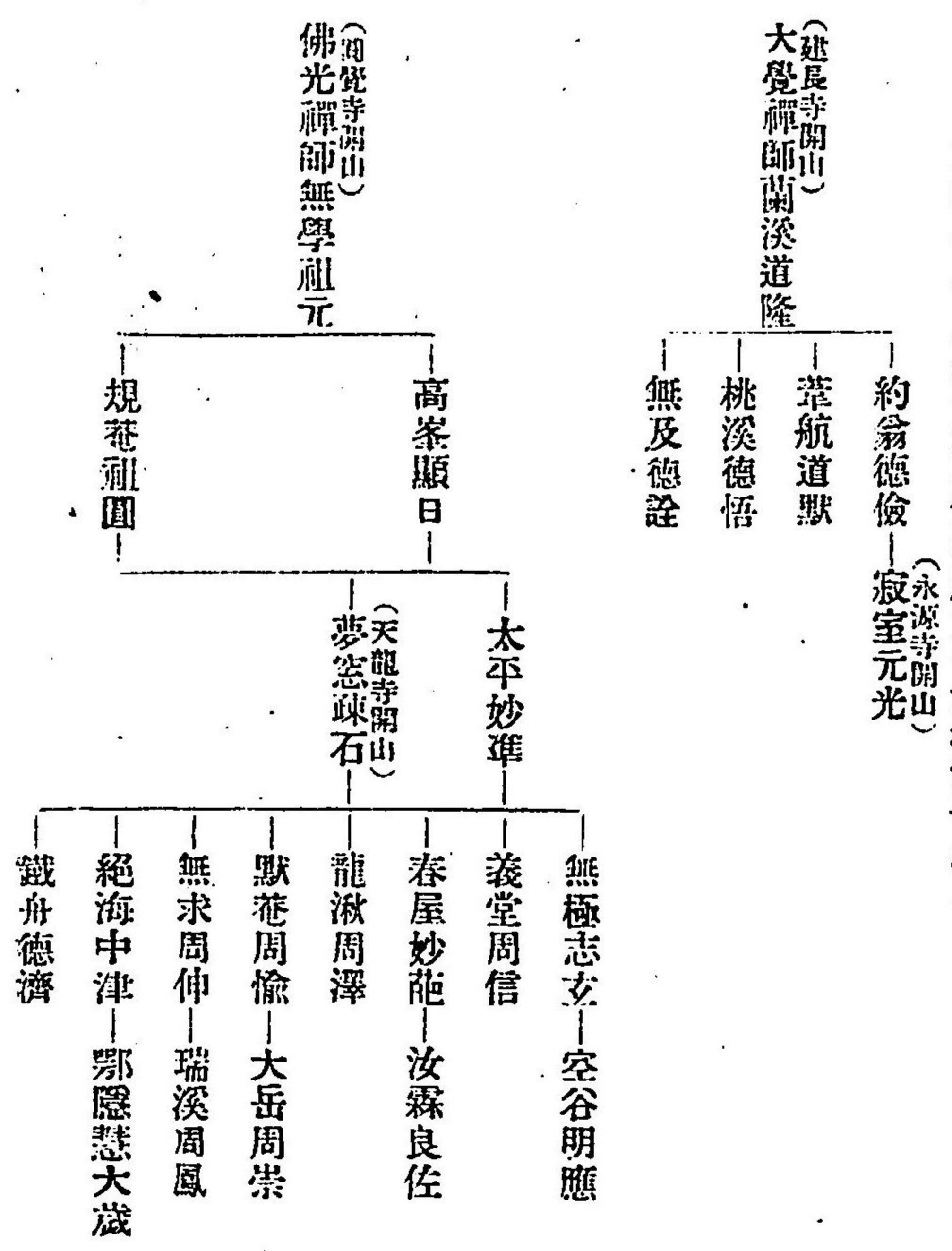
それで順序を追うてその大畧を話す積りである、

京都の方で辨圓、紹明の二禪師の門下が榮へてゐる、二禪師の門下に、大徳が輩出して、京都の禪風を舉揚してゐる其狀況を一目して解る様にすれば次の如くである、



滅宗宗興

鎌倉の方では如何であるかと云ふに道隆、祖元の二禪師の門下が大に榮へてゐる、就中祖元の門下から大徳
か出て、京都に上り東西の關係が成立つた次第である、



當時舊宗、新宗の衝突は續いてゐた、京都では天台、眞言が常に禪宗を壓抑し、妨害するに力を用ゐたが天
台、眞言には大徳高僧が出てゐて、禪宗には盛に出て禪宗は益興隆した、しかも此の京都中心時代に入り
益興隆した、これは自然の勢であつた、

後醍醐天皇は、大に禪宗に御意を傾けたまひ、常に禪宗の高僧大徳を宮中に勅召したまうて、禪宗の法門を
談したまうたが天皇の間答書は傳つてゐる、その御熱心であつたことは、問答書等て明に分る、個様の次第
で益京都に禪宗の僧侶が尊重を受くる様になり、天台、眞言の僧侶は大に悪意を挾んでゐたが、遂に破裂し
て元亨の宗論になつた、

平安朝に天台宗が興つた時に、法相宗が對抗して一大宗論があつた、所謂我國四度の大宗論の一で、應和の宗
論と云ふ、此時天台宗の良源即ち慈惠僧正が勝つて、天台宗が興隆したわけである、然るに元亨の宗論は天台、
眞言、法相等が合同して禪宗に對抗したものである、これを元亨の宗論と云ふが、元亨四年に改元して正中
となつたから、實は正中元年正月に宮中に於て開かれたものである、天台眞言には誰れが出たかと云ふに、
天台では玄慧、眞言では虎聖と云ふが傳はつてゐる、玄慧は宋の新註を講したと云ふ學僧である、禪宗には
鏡圓、妙超の二禪師が出て就中鏡圓が一人で引受けて辯論した様である、其宗論の模様は傳はつてゐるが、
大に興味がある、天台、眞言の方から問を發すれば、禪宗の方から答へてゐるが、其答は禪宗の間答風の答
であるから、天台、眞言の方では薩張り要領を得なかつた様である、玄慧が、禪宗に所謂教外別傳と云ふは

如何様の義であるかと問うた、鏡圓が侍者に命じて答へさせた、侍者は大聲で、八角の磨盤空裡に走ると叫んだ、虎聖が、禪宗の禪とは如何なるものであるかと問うたが、鏡圓は靜に、白雲萬里と答へた、始終個様の風であるから、天台、眞言の方では薩張り要領を得ないで閉口した、それで終に禪宗の方の勝と云ふことになつた、此宗論が終つて退散の途中で鏡圓は寂したと傳はつてある、後ち妙超は大に朝野の尊重を受けた、殊に赤松圓心の本願で紫野の大徳寺を開いた、これが京都に於て武家の本願で寺を建立した初めてである、妙超の門下に慧玄、義亨の二大徳がある、其に後醍醐天皇の歸依を受け、慧玄は妙心寺を開いた、宗論の後等は等の盛舉のあつたは鏡圓妙超の力である、

然るに當時更に重大なる出来事がある、それは此際に疎石禪師が勅を拜して京都に上つたのである、疎石禪師とは言ふまでもないことで、七朝の帝師と仰がる、夢窓正覺心宗普濟國師のことである、こゝで此國師の事業を話さねばならぬ、

夢窓國師は一山、顯日の二禪師に師事して禪を究めたものである、顯日禪師の事は未だ話さなかつたが、後嵯峨天皇の皇子で祖元禪師の法嗣である、夢窓は顯日の法嗣で祖元禪師の法孫である、常に世間に顯はるゝことを嫌うて幽棲しておられたが、正中二年に勅命を辭することが出来ないので、上總の退耕庵を出て京都に上つた、これは南禪寺の法席を繼ぐためである、南禪寺の法席は一山、徳儉が相續したが、元應三年に徳儉禪師が寂して、其後を繼ぐ大徳がなかつたから、勅命で夢窓を請することとなつた次第である、其時夢窓國

師の詩がある、世路悠悠懶_レ往還、一庵甘分_レ殘山去々々、これが國師の眞意であつた様である、然るに再三の勅命で辭することが出来ないので、徳儉の後を繼ぐことになつたが、京都に上つてからは、大に天皇の御飯依を受けて、常に宮中に入つて法門を説いた、勅命で臨川寺を開いて住するとなり、鎌倉から數々請待せられても再び下らなかつたが、所謂建武中興の後益御飯依を受くることになつて、京都で大に禪宗を擧揚したが、鎌倉の禪宗勢力の西遷は、全く國師の力に由つた次第であるとは明瞭な事實である、國師の年譜建武元年の條に次の様の言が見えるが、當時の事情が察せらるゝ様である、

始關東亡時、人皆謂禪苑其不興也、最明寺殿平公護禪宗、子孫相繼欽奉其法、天下化而奉之、今平氏已滅、惟禪宗誰爲護乎、至是詔降召師、禪徒歡呼之聲隘乎山林、而徹乎街衢、師亦自惟斯乃護法善神、不忘先佛記、薪故使然也、由是心倍勇健、以救法爲自責也、云々、

南北兩朝が分立する様になり、室町幕府が開かれて全く政治上の権力が、鎌倉から京都に遷つた同時に、禪宗の勢力が京都に遷つて京都が中心になつたが、其中心の中心は夢窓國師であつた様である、室町幕府の歸依は尋常の事でない、尊氏、直義等は師資の禮を執つて事へてゐた様である、勅命で天龍寺を開いたが、實は尊氏の力て建立の工事が出来上つたものである、其後京都で夢窓國師の勢力は、如何にも驚くばかりのものである、

さて京都で禪宗が盛になれば其盛になるにしたがうて、天台、眞言等は益壓抑し妨害しやうとする、彼等は

南禪寺、天龍寺の繁榮を見て大不平である、就中比叡山の僧徒は暴力で南禪寺、天龍寺等を破壊しやうとするに至つた、其顯著なるは康永應安二度の吶訴である、其始末は委く説くことも出来ないが、彼等が暴力で騒立てる際に、夢窓國師等の態度のは如何であつたか、これは國師の傳記語録等で見ればよく分るが、國師は弟子共を誡めて、彼等の暴力に對抗しやうとはしないで、至極平穩に装ほひ、沈着に構へてゐた様である、その頃何人かの警句がある、靈龜背上天龍唾、三千群狙叫不驚、至極滑稽であるが實際の状況を示してゐる様である、個様の工合で着々國師の事業は成立つたものである。

夢窓國師が如何様に禪宗を説いたかと云ふとは、ほゞ其著作で判る、國師の著作は語録もある、詩歌もある、然し一番國師が禪宗を説いた様子の判るものは、夢中問答である、一部の書で世間に行はれてゐるが、其問答の中には鎌倉、京都の二様の禪風を調和合同してゐる様に見えるところがある、こゝでは是等の事を委しく話すこともできないが、當時の禪宗の形勢を察するに付ては、大切の書で必ず讀まねばならぬ。

畢竟するに、當時一種の國家的佛教の形骸が完成した様である、京都に公家、武家の二勢力が對立する様になつて、二勢力に伴うて公家佛教、武家佛教が對立した、詳に言へば共に國家的佛教であるが、公家の勢力に依つてゐる天台、眞言と、武家の勢力に依つてゐる禪宗とが對立した、然るに武家の勢力の益強大なると共に、武家佛教である禪宗に高僧大徳が輩出し、所謂内外相助けて武家佛教が旺盛を極むるとになつた次第である、それで室町幕府以來禪宗は、第二の平安朝佛教になつてしまふた、平安朝の天台眞言が、國家安穩

の祈禱を盛に行ふた様に、禪宗が同様の祈禱を盛に行ふこととなつた、要する所禪宗が極盛の域に至つた時、禪宗の眞面目は大半没してしまふたものと謂うてよからう、

五山を定めたと、諸國に安國寺を置いたとなど話さねばならぬが、五山の事は前に一口話したから略して置かう、安國寺は同じく幕府の力で、京都並に諸國に置いたもので、丁度奈良朝の國分寺の様なものである、國分寺の制に倣ふたもので、敗類してゐる國分寺を再興して安國寺と寺號を附したのもあつた様である、幕府の力で所謂興禪護國が事實になつたものと見てよからう、然し國分寺の様に普く諸國に置くことは出来なかつた様で、ほゞ其故跡は分かつてゐる、

南朝の延平六年、北朝の觀應二年に夢窓國師は遷せられたが、其遷化せられたとは、禪宗の勢力を挫く様のことではなかつた、門下に大徳が雲の如く出てゐる、南禪、天龍等の諸禪刹は皆門下の支配するところであつて、幕府の關係は益深くなつた、尊氏、義詮を経て義滿に至り、禪宗の大徳を尊重した事は尋常でない、妙葩、周信等は師事してゐた、妙葩は義滿の本願で相國寺を開くとになり、天下の僧録司に任せらるゝとになつた、北朝の康暦二年の事である、幕府は僧録司を置いて天下の釋僧を監督したが、始めて妙葩が任せられたのである、

義滿は數々五山の位次條例等を定め、五山の上に南禪寺を置いた、これは南禪寺に何等の關係があるわけではない、義堂、周信が同寺の法席に坐つたからである、義滿が周信を尊重してゐたとはこれでも判る、常に政

治向の事柄にも教を受けてゐた様である。周信の空華日工集と云ふがある、是等の事實を知るには、必ず讀まねばならぬものである。

當時禪宗の關係してゐる事柄は極めておほい、政治、外交、文學、美術等が皆直接か間接か關係してゐる、是等の事柄に關係してゐる狀況を話さうなら、大に興味もありまじやう、然しいろいろ専門の研究を要することでありますから、一切畧しておきます。

これから五山文學に就いて、述べたいが、それは私の舊稿「五山文學小話」と云ふのがあから、それを今はこゝに掲げて、参考に供しませう。

◎五山文學小話

(上)

◎宋に教の五山、禪の五山と云ふがあつて、我國の五山は、宋にあるものに摸したものであるが、京鎌倉の兩地にあつて、京の五山、鎌倉の五山と云ふた、その起源沿革等に關しては、大に議論もあるが、こゝにはそれらの複雑なる議論は一切措き、普通に所謂五山で、室町時代に京都に榮へた天龍相國建仁東福萬壽の諸禪刹を指すのである、當時に於けるこれら諸禪刹は、學術技藝の中心であるから、諸種の方面から研究せられねばならぬものである。

◎然るにこゝには單に五山文學の事について、一ツ二ツ話すつもりである、五山文學は五山の禪僧の手に興つた支那文學である、その範圍は極めて狭いが、實は當時の文學の全體であつて、これが徳川幕府三百年間の支那文學の淵源である。

◎我國に於ける支那文學興隆には、前後三期ある、一期は平安朝の支那文學で、當時國文學支那文學は兩々對立并行して興つた寧ろ、國文學は女子文學で、支那文學は男子文學であつた、大學では一に支那文學を教授したが、歴史は訓詁を主としたから思想の發達はしなかつた、詩文は盛に作られたが、其形體思想共に幼稚である、就中詩は一に白樂天を摸した弊害で、自然に卑俗に流れてゐる、鎌倉の初に至り、國文學支那文學は一致結合して、一種の文學が興た、即ち所謂鎌倉文學なるものが興た、然るに室町幕府の初めから、再び支那文學が別立した、即ち五山文學はその別立したもので、それが我國支那文學興隆の第二期である。

◎平安朝の支那文學は大學が中心であるから、おもに公卿の手にあつた、僧侶には最澄空海の文、蓮禪の詩があるが、その餘に一も見らゝるものはない、室町幕府の詩の支那文學は、所謂五山文學で、五山の禪刹が中心であるから、全然禪宗の僧侶の手にあるが、彼等禪僧の伎倆が、はるかに平安朝の公卿の上に出てるは言ふまでもない。

◎古來五山文學に目をつけたものは頼山陽江村北海等二三の學者にとゞまるやうである、山陽は五利詩鈔の後に次の様に云うてゐる

國朝詩運兩開兩壞、猶文章一也、初壞於長慶、後壞於萬曆、中間爭亂、不暇爲中晚宋元一也、五山僧侶頗

爲_二瘦硬絕句_一、其中巨擘有_レ若_二義堂絕海_一、頗雄奇、有_二喜閑儒紳不及處_一、當時王霸盛衰渠輩冷眼傍視頗形_二之吟詠_一、含_二有譏諷_一、又非_レ近時士君子徒鑿_二刻風月_一爲_二無_二益詩_一比_レ也

五利詩鈔と云ふ書は今傳つてゐない様であるが、山陽のこの文は遺つてゐる、其五山の僧侶を揚げて當時の文人を罵詈するところ、大に興味があるてないか、義堂絶海を擧げて、一言も雪村虎關寂室におよばないは何故であらうか、

◎山陽の論詩絶句廿七首の中に一首絶海を推奨してゐる詩がある

衣中廿八顆明珠、風雅終然墮_二筍蔬_一、出類故當_レ推_二絶海_一、指揮如意_二掣_二鯨魚_一、

此推奨は當を得てゐるが廿八字の七言絶句ばかりを評價して律詩におよばない意が知れない、絶海が律詩の風格は明の全室禪師の衣鉢を傳持してゐるもので、前後に相並ぶものもなからう、

◎南山古梁禪師が五山の僧侶の詩集に關して、次の様に云うてゐる、

日本の僧の詩集は蕉堅稿、南遊東歸集、東海一漚集、高園集等いづれも入唐ありて語は和習を脱し嚴然たる中土の音なり依用すべし、濟北集空華集の如きは波瀾浩渺として提唱痛快なりといへども、多き中には自ら和習もあるべければ寧ろ約に學ぶを可とす云云、

さすがに禪師詩眼があつてその言はほい當つてゐる、然かし絶海は古今一人で、蕉堅稿に並ぶ詩集はなからう、別源の南遊東歸集、中巖の東海一漚集は今散佚した様であるが、その詩は一二の書にも見ゆるが、とて

も絶海に並ぶものでない、中巖は日本記を撰し、後醍醐天皇一見してその書を燒棄したまひたりと云ふ事からして著名であるが、實は詩よりも學問の方が得意であつたのであらう、平素好んで揚子法言を讀んでゐたと云ふから、ほいその人柄も推知せらるゝでないか、

◎雪村の岷巖集、汝霖の高園集等は如何にも嚴然たる中土の音といふべきものであらう、汝霖は絶海同時に明にあつて詩名を争ふたと云ふから、其高園集にたしかに一家をなしてゐるものであらうが、今は散佚して傳はらない様である、高僧傳の援引書目に、高園集の名を列ねてゐるが、汝霖の傳中に詩の傳はらないとあるは、前後撞着してゐる、要する援引書目に列ねてゐるが師繼は見なかつたものであらうが、道熙の高僧詩選にも、汝霖の詩が一首も掲げてないは何故であらうか、いよゝ解せられない、然るに古梁が高園集を擧げて評してゐるを見れば、當時は傳はつてゐたは明白であるが、今は散佚して傳はらない様である傳中に吞海樓の一律が録してゐるが、あの一首の伎倆で推測すれば、未だ絶海に敵對するとはできないであらう、

◎虎關の濟北集義堂の空華集を評しては波瀾浩渺として提唱痛快なりとは大に妙である、虎關の博覽多識なるは、前後に比ふものもない、濟北集はこの一事で諸家の集を壓倒してゐる、虎關は古詩吟の長篇を作つたが、當時古詩を縱横に作つたものはない、虎關一人である、且つ詩話を作つたが、これが我國の學者で詩話を作つた始めである皆傳ふべき事があらう、

◎五山文學に就いて、五山の三傑と云ふものを選ばうなら、學には虎關、詩には絶海、文には義堂であらう、

義堂の文は千言萬言滾滾として流れて盡きない状がある、嚴然一家を成してゐるは言ふまでもない、

(下)

◎支那文學興隆の第二期は、全く禪僧の支配するところて、其初は榮西道元である、臨濟禪を傳へた榮西、曹洞禪を傳へた道元は、いづれも其宗の開祖であるはかりてなく、支那文學興隆の第二期の開祖である、就中道元禪師の詩文は、早くも一種の風格を備へてゐる、當時の支那文學の一方面から觀て、禪師の廣録八卷に匹敵するものはないであらう、曹洞宗に其後水月庵大智が詩文で著はれてゐるが、こゝには姑く要かないから言はぬ、

◎鎌倉幕府の初に、臨濟禪を顯揚した諸大徳、即ち圓爾、約翁、南浦、靜照、等は、皆詩文にも意を用ひたが、其作にはまゝ傳へらるべきものがある、建武貞和の頃から、天岸、雪村、虎關、別源、寂室、夢窓、古劍、龍泉、等相等て出た、所謂第二期は先づ彼等によりて開かれた、其の後、夢巖、中巖、天境、雲溪、性海、伯英、汝霖、義堂、絶海の出づるに至つて、隆盛を極めた、天岸以下の諸師は、いづれも別行の集がある、その中、天岸の東歸集、別源の南遊東歸集、古劍の了幻集、龍泉の松山集、中巖の東海一漚集、天境の無規矩、雲溪の賸隱集、西巖集、性海の石屏集、伯英の萬松集、汝霖の高園集は散佚して傳はないやうであるが、雪村の岷峨集、虎關の濟北集、寂室の寂室録、夢巖の早霖集、義堂の空華集、絶海の蕉堅稿は、傳はつてゐるが、これらの集は、いづれも我國文學史上の寶玉である、

◎支那文學興隆の第二期は、其初め榮西道元から端を開いて、漸次に興隆し、義堂絶海に至つて其極に達したもので、絶海は應永十二年四月に寂したが、絶海の後を繼紹する作家は一も出ない、實際應永の末に至つて、風氣が一變してゐる様で、絶海の前線で判然區別せられてゐるは一奇である、然し此に注意せねばならぬ事からは、應永の末から、天下騷亂の間に、所謂五山の禪僧が學問を勵たのである、絶海の後を繼紹する作家は出ないが、學者は出た、即ち漸く盛に唐宋の詩を註釋した、彼等は詩を作らないで、詩を説いた、◎日本詩史に江村北海が、五山の禪僧の詩を評し、絶海義堂の二人を推獎してゐるが、其の言は皆公平である、然るに二人に次て、太白、仲芳、惟忠、謙岩、得巖、鄂隱、西胤、玉腕、瑞岩、瑞溪、九鼎、九淵、東沼、南江、心田、村菴の十六人の名を列舉してゐるが、これは北海が思ひ當るに任せて列舉したものであらう、この十六人の中には、作家といふほどでない人がある、要するに、數百人の中より、この十六人を列舉したのは其取捨宜を得ない様に思はる、

◎應永の中頃に、觀中、天祥、愚中、東漸、岐陽、鄂隱、得巖、鐵舟、等が開へてゐるが、觀中の青嶂集、天祥の龍涎集、東漸の龍石集、岐陽の不二遺稿、鄂隱の南遊稿、得巖の東海瓊華集は散佚して傳らなる様であるが、其時は諸書に遺つてゐるから見ることもできるが、いづれも絶海に稍後れて寂したくらのであるから、尙ほ大に傳へらるべきものがある、然し愚中の卯餘集、鐵舟の閻浮集は共に傳はつてゐるが、其作は頗る拙である、五山の盛時に一世の大宗匠と云はれながら、其詩文の拙なるは愚中策彦の二人であらう、愚

中の作はおほく傳はつてあるが、一首も見らるゝものがない様である。

◎策彦は明に使したとて著はれてゐるが、其入唐記、初渡集、再渡集等で示されてゐる様に、數次明に航しおほくの名匠にも交はつてゐなから、其作は極めて拙であるは、如何にも解せられないとの様である、然しその數のおほいには驚かねばならぬ、別行の三千句九千句は坊間にも傳てあるが、實際六千首以上有してゐるとのである、策彦同時に天龍寺の江心は策彦に競うて五千句作つたと云ふがその詩は傳はらないやうである。

◎應永以後に著はれてゐるは誰れてあらうか、瑞巖、惟忠、心田、江西、東沼、天隱、桂菴、一休、嵩山、信仲、景全、慧鳳、常菴、瑞溪、雪嶺、天章、天興、彦龍、月舟、竺雲、南江、萬里、湖月、祖溪、太白、横川、正宗、蘭坡、三益、中恕、大滯等は、いつれもその集を刻してゐるから、一家を成してゐるものと見ねばならぬ、然るに是等諸家の集で、現存してゐる者は僅少である、惟忠の雲終猿吟、心田の聽雨集、江西の續翠集、天隱の嘿雲稿、桂菴の島陰漁唱、一休の狂雲集、景全の宜竹殘稿、慧鳳の竹居清事、常菴の角虎集、瑞溪の臥雲稿、雪嶺の梅溪集、彦龍の半陶稿、月舟の幻雲稿、萬里の梅花無盡藏、三益の三益集、中恕の碧雲集等である、瑞巖の蟬閣外稿惟忠の春耕集、東沼の流水集、天隱の翠竹真如集、嵩山の少林西信仲の宗鏡集、景全の翰林胡蘆集、天章の梅樹集、天興の萬里集、竺雲の繫雲蕪南江の鷗巢集、萬里の棘門集、湖月の湖鏡集、祖溪の水拙文集、太白的鴉臭集、横川の京華集、閨門集、東遊集、正宗の秃尾長柄

帚蘭坡の雪樵獨唱集、大清の紙襖集等其集は數へきれないが是等は今日存してゐるか否か未だ譯らない、

◎應永の頃から、五山に學問が興つた、其魁は岐陽得巖桂菴等であらう、岐陽は盛に四書の朱熹註を講し、古來傳習の謬を正し、得巖は始めて莊子口義を講したが、其後桂菴、雲章、慧鳳等相尋て出て漸次盛に朱熹集註を講したが、皆一方に嚮へた學匠である、正平の頃、玄惠が始めて宋の新註を用ゐたことは何人も熟知してゐることであるが、玄惠の後ち四書を講し新註を用ゐるものもなかつた様である、岐陽得巖桂菴に至り大に推奨したが、其功は没せられないのである、五山の經學が是等の人から興つたは事實である、岐陽の門下雲章は始めて周易傳義を講して益盛に新註を推奨した、

◎當時五山に於て、經史詩文並に研究せられたもので、月舟、仲芳、桂林、桃源、竺雲等はいつれも博覽洽聞て知られてゐるが、彼等は史記漢書等を講し、また諸家の詩を註した、桂林の史記提要鈔、古文真寶註、桃源の史記鈔、竺雲の古文真寶鈔、四河入海等はいづれも一時流行したもの、様である、就中宋詩は盛に愛誦したものと見え、東坡山谷の詩を註したものは極めておほい、竺雲、萬里、瑞溪、江西、等皆東坡の詩鈔を編した、即ち四河入海もその一である、唐詩は三昧詩を愛誦したもので桂林萬里の註がある、然し萬里は自ら一代の作家を以て任してゐたやうであるが、其詩は極めて拙である、決して唐詩の妙所を領會するとはできなかつたであらう、心華は杜甫の詩を註し、心華臆斷を撰したが、其書は傳らない、天隱は錦繡段を、月舟は續錦繡段を、月舟の弟子絶天は續錦繡段鈔を編した是等の書は後世までも流行したが、個様の事は一

- 越前祥園寺
- 無端祖懷(能登某氏)
- 奥州永徳寺同高深寺
- 道叟道愛(出羽平氏)
- 伯耆退休寺下野泉溪寺奥州慶徳寺同示現寺
- 源翁心昭(越後源氏)
- 越中立川寺
- 大徹宗令(肥前某氏)
- 大方韶勳(未詳)
- 能登定光寺備中永祥寺
- 寶峯良秀(能登某氏)
- 竺源超西(未詳)
- 加賀聖興寺
- 太山如元(筑紫某氏)
- 竺蕪了源(越前某氏)

太祖圓明國師瑩山紹瑾が、大に宗風を擧揚せられた、國師は比類ない大徳であつて、其門下に多くの亦大徳が出られたから、益興隆する事になつたは事實である、國師は越前の産である、曹洞宗の中心地とも云はるゝ土地に生れたが、幼にして永平寺第二世孤雲懷辨の下に投じ、懷辨禪師遷化の後、第三世徹通義价の下で參究し、後京都の地方に出て寶覺、慧曉、覺心等の諸禪師をも歴問せられた、是等の諸禪師は、いづれも臨濟宗の大徳である、越前に歸りて寂園及び義价に師事し、遂に義价禪師の法を嗣がれ其附屬を受けて、曹洞の宗風を擧揚する事を以て自ら任しておられた、加賀、能

登の地方に歴遊して道場を開立せられたが、噴々たる盛譽は京都にまで傳はり、元亨の初めてゐる、後醍醐天皇の勅召を被られた様である、然し京都には上らないで、勅問十個條を奉答せられた、それで北國に潜める國師の盛譽は、朝野を動かし了様である、諸嶽山總持寺を開かれたは、同寺の定賢禪師と云ふか延請せらるゝに任せて、道場とせられたものゝ様であるが、これが後に永平、總持二大本山と云はるゝ様になつた、國師の勢力は驚くばかりである、正中二年即ち臨濟の夢應國師が、勅請を拜して京都に上る年である、國師は此國で遷化せられた、然し其後國師の門下は盛に榮へた、門下に大に顯はれてゐるは明峯素哲、峩山紹碩の二禪師である、二禪師の下から二大法派が出でたる様であるが、峩山派と云ふ方は、益榮へて門下五派相競ふて榮へる様になる、曹洞宗の大徳は皆開祖の遺風を受け、顯貴に近附くことを避けられた、寒巖義尹禪師は皇胤であるが、數々勅請を被りながら固辭して京都に上られなかつた、明峯素哲禪師も、數々勅請を被りながら固辭せられた様である、これか曹洞宗の眞面目のあるところであらう、後醍醐天皇は禪宗に御意を傾けたまひ、臨濟、曹洞の別を問ひたまふやうの筈がない、數々勅請があつたら、曹洞宗の大徳が京都に上る機會はあつた、然し一人も京都に上らうとはせられなかつた様である、京都で臨濟、曹洞相並で興隆すれば、大に壯觀であつたであらうが、共に盛になつたものは、共に衰へねばならぬ筈である、室町幕府の中等以後、京都の臨濟は大に衰へた、然し諸國の曹洞は大に盛になつたは事實であ

る、畢竟當時曹洞宗の大徳が京都に上らなかつたは、曹洞宗の眞面目を保つたばかりでない、禪宗の眞面目を保つとが出来た様である、それは後の事實に判る、

峩山紹瑾の門下の大徳は、四方の諸國に奔りて傳導せられた良詔道愛は奥州地方に入り、寂靈心照は山陰地方に、良秀は山陽の備中地方に、圓照は九州の日向、薩摩地方に入りて道場を開かれた、是等地方の勢力は決して等閑に附してはならぬ、

以上臨濟、曹洞二宗の形勢を對照すれば大に相果してゐるが、單に曹洞宗の上に就いて熟察すれば、稍圓明國師の門下の益盛なるに付て稍宗風が變遷してゐる様にあるが、これは畢竟時勢の強迫である、

○第五地方傳播の時代

第五に地方傳播の時代と云ふは、後花園天皇の永享の初から、後陽成天皇の朝まで大凡百六十年ばかりの間である、此年間の禪宗の形勢により、假に稱したるものである、

さて鎌倉中心の時代と云ひ、京都中心の時代と云ふは、共に主として臨濟宗の形勢から附けたものである今は、主として曹洞宗の形勢から附けたる者で、期間に諸國の地方に傳播して勢力を得たものが、大半曹洞宗である、

前に掲げた様に、圓明國師の門下は大に繁榮したが、就中明峯素哲、峩山紹碩の二禪師の門下が繁榮した様である、然し明峯素哲の門下は、重に北國に繁榮した、唯詩偈で聞へてゐる大智禪師が、西海に一門を構へ

たばかりの様である、峩山紹碩の門下の龍象は四方の諸國に奔つて其家風を擧揚した様である、是等の事實を總合して、當時の曹洞宗の形勢を觀察せねばならぬ、

室町幕府は幕府と云ふも、實際諸國の諸大名を統一してゐるのでない、諸國の諸大名は、孰れも獨立の態度であつた、幕府が衰ふれば衰ふるだけ諸大名が強くなる、諸國の諸大名は、銘々腕次第で土地に割據して、自由に其土地を治めてゐた、是等の事實は、今悉く説くまでもないが、禪宗が諸國の地方に傳播するには、大に關係があつた次第である、諸國の大名の割據するに付て、禪宗の諸大徳が亦自ら割據の狀をなした様であるが、これは大に研究せねばならぬ事であらうと思ひます、

武家佛教と云ける、禪宗は、實際武家の思想に投合し易いものであるから、武家の歸依信仰する様になり、諸國の諸大名は相競うて、禪宗の高僧大徳を請待して尊敬したが、これが禪宗の大なる勢力になつた様である、

武家佛教と云ける、禪宗は、臨濟、曹洞共に同様であるが、自然の形勢で二様に分れ、臨濟の高僧大徳は皆幕府の尊敬を受けたが、曹洞の高僧大徳は、皆諸國の諸大名の尊敬を受くることになつた、幕府が衰へて諸國の諸大名が強くなるにしたがうて、曹洞の高僧大徳は勢力を得る様になり、諸國の地方に曹洞の宗風を擧揚する様になつたもので、即ち今所謂、地方傳播の時代と云ふが開かる、次第であるか、地方に傳播するは主として曹洞宗である、

禪宗史の上から観れば、地方傳播の時代は大に大切な時代であるから、一一其事實を研究せねばならぬが、今話をするには目立つ華々敷事實でないから、一向興味がない次第であるから、出来るだけ略しておく積りである。

叡山紹願禪師の門下の龍象は、四方の諸國に奔つて宗風を擧揚してゐるが、是等の門下から亦龍象が盛に出て、各其事業を繼いで、益興隆してゐる状況は驚くばかりである。

北陸諸國は、佛教に因縁が深いものであらうが、これには種々の理由もあることであらうが、常に佛教が盛に行はるゝ様である、鎌倉時代の新佛教と云はるゝ宗門は、大半北陸を根據地にして興隆した様である、曹洞宗、眞宗、日蓮宗の一部は全く然である、就中曹洞宗は著しいものであらう、北陸で北陸諸國の人の手で興隆した様である、圓明國師を首とし其門下の高僧大徳は、皆北陸の出生で加、能、越の三國に限りてゐる様である、即ち國師が越前の出生で其門下の明峯、無涯、壺菴、珍山が加賀、叡山、默譜か能登の出生である、是等諸禪師の門下が亦大半は、北陸諸國の出生である様に見える。

然れば、北陸は、佛教の根據地であり分け曹洞宗の根據地であるが、此根據地から四方の諸國に傳播したもので、其の主なる功勞は北陸諸國の人に歸する次第である、換言すれば曹洞宗の興隆傳播は、北陸人の精神的事業の成立したものと見ては如何であらう、固より地理上より下す一分の視察であるが、實際の事實は、かゝる結論を得るに至るであらうと思ふ。

北陸は根據地中心地である、越前の永平寺、加賀の大乗寺、能登の總持寺等が大叢林となつて益繁榮したが、是等の大叢林から出で四方の諸國に奔り、眞宗風を擧揚した次第を話さう、

古くから京都に曹洞禪はある、宋僧東明慧日禪師があられたから、其下に別源、圓旨等の大徳が出られた、然し是等は、臨濟禪に雜つてゐた臨濟宗の建仁寺等に化せられた、それ故道元禪師の主唱せらるゝものとは大に形勢が異つてゐる、共に曹洞禪ではあるが我國の曹洞宗は、道元禪師の一門を謂ふことは論の無いことである、京都から山陰の地方へ、曹洞宗を傳播した草分は通幻寂靈、源翁心昭の二禪師である様である、二禪師は京都に上り幕府の歸依を受けられたが、京都で宗風を擧揚しやうとはせられないで、寂靈は丹波に入られた、これは細川頼之の歸依で、その領地である丹波に道場を開かるゝとなつたが、その盛徳は京都に聞へ渡り、後醍醐天皇の朝のとである、特に勅があつて天下の僧録司に任せられた、これが曹洞の僧録司の始めである、寂靈の門下の龍象相尋て山陰の地方に入られた、即ち善教、自性、祖祐、曇貞等は皆丹波に入りて宗風を擧揚せられた、祖祐、曇貞の二禪師は京都に入り足利義滿の尊敬を受けられたが、京都に留らうとはせられなかつた様である、寂靈が丹波に入られて稍後であらうか、源翁心昭禪師は、京都から伯耆に入つて道場を開かれ、其門下玄奘が後を繼いで、山陰地方の甘露門と目せられた様である、

山陽地方より、西海諸國に傳播した状況は如何であるかと云ふに、此地方で先づ曹洞の宗風を擧揚したのは、實峰良秀禪師の門下の常喜、性宗等の諸禪師であらう、是等二禪師が毛利氏、赤松氏の請待を受けて道場を

開いた、明峰素哲の法孫である定紹、通幻寂靈の法孫である、正猷等が相尋て其興隆事業に盡くされた様である、正猷は竹居禪師の事である、石屋真梁禪師の法嗣であるが、大内氏の請待を擧げて大に宗風を擧揚した其法弟である、永宗、殊禪、永本等の諸禪師が皆前後に大内氏の請待を受くることになつたが、當時大内氏は防、長、豊、筑、四州の大守であるから、同氏の歸依では等の地方に大いに曹洞宗が傳播した様である、九州は早くから肥後に寒巖義尹禪師が一門を構へられたから、永くその徳澤が遺つてゐたが、無外圓照及次寂靈の門下石屋真梁と云ふが其地方から出られて、大に曹洞の宗風を擧揚せられたが、無外圓照禪師は薩摩の人で、肥後に入つて曹洞禪を開き、後峩山紹碩禪師に師事して其法嗣となられた大徳であるが、日向、薩摩地方を巡化して島津氏の請待を受け、其地方に道場を開かれた、真梁禪師は亦薩摩の人で島津氏である、京都に上つて臨濟宗の諸高德に歴事志、後通幻寂靈の法嗣となられて薩摩に歸り、島津氏の請待を受けて大道場を開かれた、當時島津氏は薩摩、大隅、日向三州の太守であるから、同氏の歸依では等の地方に曹洞宗が興隆傳播したのは事實である、それで山陽道から、九州地方へかけては良秀、真梁二禪師の下から榮へた様で、就中所謂通幻下が繁榮した、大内氏、島津氏等が外護の力を盡した様である、

更に轉して奥州地方に傳播した状況を見るに、矢張り峩山門下の龍象が、先鞭を着けて居らるゝ様で、無底良紹、道叟道愛、源翁心昭、月泉良印、の諸禪師が巡化して諸國守の請待を受けられたが、源翁心昭と云ふは、那須野の殺生石濟度の傳説で著名な和尚で、下野地方に徳澤を敷かれた様である、月泉良印の門下の諸

禪師は、相競うて奥州地方に道場を開かれたが、孰れも大叢林をなした様である、それは是等諸禪師の行實記で明である、

東海道諸國に傳播の状況を見るに、此の地方も亦峩山門下の宗真、寂靈の二禪師の下から榮へてゐる様である、寂靈禪師の下で東西の二甘露門と云はれたは、薩摩の眞梁禪師、相摸の慧明禪師である、慧明禪師といふは最上寺の開山了菴で聞へてゐるが、相摸の産で初め鎌倉で臨濟禪を受けられたが、後寂靈禪師の法嗣となられて相摸に歸り、小田原で所謂東海禪林を開かれたが今の最上寺である、當時鎌倉の諸禪利に對立して、一大道場となつた様である、稍後の事であらうが宗真の法孫、天闔禪師が遠江に巡化せられたが、飯田城主山内氏の請待を受けて、其地に道場を開かるとになつたが、禪師の門下は大に其地方に繁榮して、遂に可睡齋が開かるゝとなり、東海道諸國の一中心となつた次第で、所謂太原下が此の地方に繁榮したるものである、

以上、諸國の地方に傳播の状況は、至極簡略の話で思當り次第に、諸禪師の事業を擧げたものであるから、大切な事實を漏してゐるともあらうと思ふが、委しく話せば話すほど複雑に陥り興味のない様であるから、至極簡略で蕪雜であるが、これで止めておきまじやよう、

次に臨濟宗の形勢は如何であるかと云ふに、京都の諸禪利は諸禪師が群がつてゐるが、其禪風は漸く衰頽してゐる、所謂幕府佛教が幕府の運命に伴ふは、必然の道理であつて、應永以後幕府の勢力は、漸く下り坂に

なつてゐるからであらう、然し何分にも諸禪師の内には學問もあり、識見もある高僧大徳があるから、是等の高僧大徳は、幕府が内政外交の顧問となつておられか様である、それで代々の將軍が歸依尊敬は、變らなかつた様である、

畢竟室町幕府の半面は、臨濟宗の禪僧で保もたれてゐた様である、禪僧は内外の政治向の事柄に關係してゐた、義滿は義堂周信、大岳周崇の教をうけてゐたが、義持は嚴中、周騫、義教は得嚴、惟尙の教を受けてゐた、義政は傲慢な男であつたが禪僧には頭を下げてゐた、瑞溪周鳳、横川景三、性海靈見等に師事してゐた様で、自ら靈見禪師の履を把つたとは、喧く傳はつてゐる事實である、周鳳景三は數々外交上の文書を草してゐる様であるが、是等の事實は珍くないことである、當時禪僧が、外交上の文書を草してゐるばかりでない、數々幕府の使命で支那へ渡つてゐる、

南朝の興國三年、北朝の曆應四年の頃である、幕府の使命で至本と云ふ禪師が元に渡つて、天龍寺建立の寄附金募集をしたが、其後續々元明に渡つてゐる、其使命で渡つたもので聞へてゐるは、祖阿、元澎、永嵩、等堅、正龍等である、是等の事實は委しく話す邊もないから略しておかう、

個様な次第で京都の諸禪刹に、學問、詩文、書畫に通達した禪僧はあつた、然し禪の眞面目はなかつた様である、即ち禪のぬけ殻である、學問詩文書畫が盛であつて、これが臨濟宗の全體であつた様に見える、それで今臨濟宗の形勢と云ふ上から見れば、實に落莫である、滔々たる諸禪師は皆大事を忘却して、未技未能に

つてゐた様である、

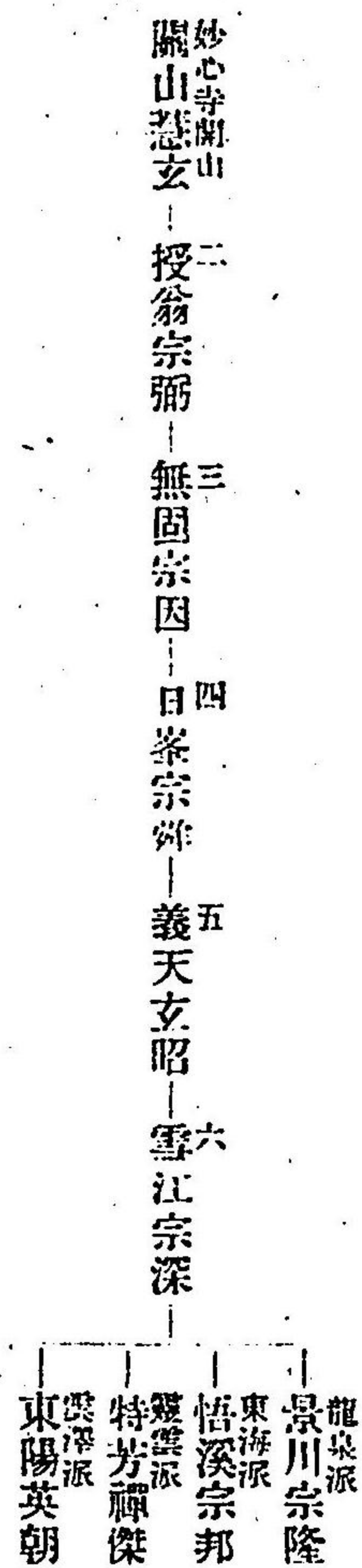
室町幕府の時代の第一の學者と云はるゝ、一條兼良が口を極めて僧侶を罵つてゐるが大に面白い、即ち尺素往來に次の様に言うてゐるは、實際の状況であつたであらう、

近來問叢林出世之僧者、開闢法門鼻孔手段、偏嗜僧家之文字言句、將亦稱知識之族者、不持戒律、不剃鬚髮、執付無量之雜具、引率數多之僧尼、莫定其所居、遊行於都鄙、或入鄙屋、或占辻堂、妄說狂語以號談義、癡喝噴舉以名攝禪、籍之有起、情見之者、有生、悲心之者、全皆不足、信仰、併是末法之故歟、

更らに一事の話さねはならぬ次第がある、それは宗峰妙超禪師の法系の状況である、禪師の法系は二派に分れてゐる、一に關山慧玄の下で妙心寺に傳はり、二は徹翁義亨の下で大徳寺に傳はつてゐるが、それで妙心寺大徳寺が如何なる状況であるかと云ふに、全く五山派とは別様の位置にあつて、幕府に關係がなかつた様である、殊に妙心寺は朝廷の御歸依を受けたと云ふ次第で、幕府は至極冷遇した様である、殊に妙心寺第二代授翁宗弼禪師は、南朝の忠臣藤原藤房の出家したものであると傳へてゐる、妙心寺六祖傳に明言してゐる、然しこれは事實でない、幕府の繁榮してゐる際、藤房が妙心寺で安然禪床に憑つて、如意を揮つて居らるゝ筈がない、然し常に朝廷の方に附いてゐたは事實である、幕府は兎角冷遇してゐた、義持が妙心寺の莊田を沒收した事でも判る、それで此法系の無文、元選、一休、宗純等は京都を出て諸國に巡化せられたが、是等の事實には深い理由がある、然し永亨の初に至り日峯、宗舜等の苦心經營で、妙心寺の莊田を復せらるゝこと

になつて、再興の氣運が向いた、其後五山派が漸次に衰頹するに反し興隆する様になり、雪江宗深禪師の下から、四派が分れて競興するとなつた、江戸幕府の初五山派には一人の大徳もないが、妙心寺、大徳寺には愚堂、東空、澤庵、宗彭等の大徳が一方に聳へてゐるが、恰も大厦の覆らんとするを、一木で支へてゐる状況である、

次の黄檗開立の時代を開くものは、實に、妙心寺一派の大徳が力を盡せされたからである、それは隠元隆琦禪師の事業の下で話しましやう、



第六黄檗開立の時代

第六黄檗開立の時代は、後陽成天皇の慶長の初めから、東山天皇の末まで大凡百餘年の間を稱するのである、室町幕府の末禪宗の勢力は、諸國に散漫して統一してゐなかつたが、江戸幕府が開かれて政治の中心が江戸に遷る様になつて、漸く江戸の方へ禪宗の勢力が集つて、統一せらるゝ様になつた、然し初めは東西對立

の状況であつたが、實は京都の臨濟宗は、慣習力て一方の勢力を維持してゐたものであるから、漸次に江戸が中心になる様になつた、

當時以心崇傳禪師が出で幕府の内政に關與したが、臨濟宗の形勢は禪師の力で支配せられた様である、江戸の金地院が僧録司となる様になつて、全く臨濟宗の中心が江戸に遷つたものである、

京都には愚堂東宮禪師が、一方に聳へた大徳であつて、其下に一絲文守禪師が出られて盛に禪風を擧揚せられた、宮中に於て法門を説かれたともあつた、それから京都から澤庵宗彭禪師が關東へ下られ、三代將軍家光の歸依を受けて、品川の東海寺を開かれた、同時に、嶺南崇六禪師が芝の東禪寺を開かれた、東北には雲居希庵禪師が松島の瑞巖寺を再興せられた、是等の三人は關東に於て、一方の門戸を開いて居られたのである、此時代には曹洞宗は、人物が大に欠乏して居る、興聖寺の萬安英住禪師が、當時の曹洞宗を代表せる人物であつた様である、個様に各地に禪宗の大徳が居つて、命脉を繋いで居りました、是等が先づ一世に聳へた大徳であるけれども、昔しの盛大に比すれば誠に寂寞たる状況であつた、

此の如き時代に、黄檗宗が開立せらるゝとなつた、これは徳川時代に於ける大なる出來事である、黄檗宗開立は、隠元隆琦禪師の渡來に始まつたので、當時は明末の騷亂を避けて西來した僧は澤山あつて、皆長崎の地方に留住してゐた、隠元隆琦禪師が日本へ渡來した事に就て、誤た傳説がある、それは、後水尾上皇の勸請に由ると云ふとばである、最初後水尾上皇が古石禪師をば、支那に遣して高僧を招待せられた、此の招

待に應じて隠元が渡來したと云ふ様に傳はりて居るが、實は然てはない、當時の事情は其の様の事を許さない、然るに支那の書籍に依ると、成程隠元は王命に依りて日本へ渡來たとしてある、我國の歴史では十三朝紀聞等に、勅請に由る様に見える、殊に面白きは大學で編纂せられた國史眼である、後水尾上皇が明僧隆琦を召す、隆琦は其徒隠元等二十餘人を率ゐて來るとある、隠元禪師は諱を隆琦と云のであるから、一人を二人に書いたのであるが、禪宗の僧侶には字號が澤山ありまして、取り違へるともありませんか、然しこれは甚しい誤りである、其實は當時長崎には明末の商人が來て、一の居留地を開いて居て、始終支那から僧侶が居留地に來て、禪宗を弘通して居た、隠元隆琦禪師の前に澤山渡來して居る著名なるは逸然、古石、濶謙等である、是等は皆居留民を教導して居たのである、彼等支那人は、自分の宗門の僧侶を招待して寺院建立して居た、長崎の崇福寺、興福寺、福濟寺、是等の寺院は皆支那僧が住持で管轄してゐたのである、隠元隆琦禪師も彼等支那人に招待せられて、日本へ渡來したのである、禪師は閩州の黃檗山の住持で、重要な地位を保つてゐるから、容易に動くとは出來ないのであつたが、初め居留民が、禪師の弟子を遣して呉れる様に請ふた、禪師の弟子に也懶圭と云ふがあつて、此人を日本の居留民の請により派遣するとなつて、也懶圭は早速出發しましたが、海上暴風の災難に逢て遷化せられた、これが、禪師自ら日本へ渡來する様になる一因縁になつたのである、つひに重要な地位を擲て日本へ渡來したのは、一分弟子を吊ふ至情に出でたのである、殊に日本の居留民の方では、也懶圭海中で遷化した後、重ねて日本から數々渡來を請ふたのである、即

ち崇福寺の逸然が門末連署て書を送つた、それ故隠元隆琦禪師は志を決して、日本の承應元年明の仁治九年に我國へ向て出發したのである、其時隠元は六十一の老年であつた、黃檗山に於ける重要な地位を捨て、一門の弟子を率ゐて日本へ渡來したるとは、大なる出來事であつた、其時に逸然と隠元との往復の書翰があるが、それで見れば、日本へ渡來した事情が詳に解ります、それで長崎へ來た後は大變な人氣を受け、内外の道俗相競つて禪師の門に教を請ふとなり、大に西國を騒がしたが、追々京都に上ると云ふとに就ては、種々の困難があつた、それは長崎の奉行より全く支那の反間ではないかと云ふ疑を受けて、京都に上るとを抑留せられた、其時に京都妙心寺の龍溪性潛和上と云ふがある、曾て三年許り前に隠元語録二卷の舶來したるとを讀て、隠元隆琦禪師の大徳であるとを知つてゐたから、其渡來を聞て大に驚喜し、是非迎へたいと云ふとで、熱心に奔走の上長崎奉行の抑留するにも拘らないで、竺印と云ふ人を遣して遂に京都に迎へた、明歴元年に京都の方に上るとになつたが、僅かに京都、大坂、奈良、堺等の五ヶ所に限り法門を説くとを許され、且つ其席に集るものは男女三百人以上を禁ぜられて居つた、其困難なる狀況は察せられます、然るに龍溪性潛は後水尾上皇の御歸依を受けて居る故、後水尾上皇に推舉して、上皇から法門上の問を下さるゝとになり、禪師はこれに對して答を上るとになり、初めて上皇の御歸依を受くる様になつたのである、先づ個様なる譯で日本へ渡來した事情と云ふものは、今日黃檗宗に傳へて居るところとは幾分か異て居る、實際は日本へ渡來してから、種々困難して居られたのである、個様の事實を説いてはならぬ、禪師の後裔たるものは益々事

實を詳にして、その苦心を思はねばならぬ、

萬治の初に江戸に出て、將軍家綱公に謁して日本に於て傳道の事を請はれた、それで幕府の許を受くることになり、翌年二月今の山城の宇治に地を賜り、根本道場を開立することになった、是等の事は皆龍溪性潛の斡旋盡力の結果である、寛永元年に至り工事が落成して、黄檗山萬福寺と號しました、これは関州の萬福寺を模擬したもので、制度風儀もそのまゝである、鎌倉に於て建長、圓覺を支那風にしたよりは、一層支那風であつて一山器具物品も、言語動作も皆支那風であつて、一の支那國を開いた様でありました、それ故黄檗山へ參詣したものが、山門を出て、茶摘みの歌を聞て初めて日本へ歸た様な心地がしたと云ふ位であつた、そして寛文三年に愈黄檗山が落成して、祝國開堂の時には各宗の大徳も皆袖を連ねて參會しました、それは隱元隆琦が上皇、並に將軍に歸依を受けて居ると云ふのも、一の原因となつた次第であらう、然し此落成の法會の後間もなく隱元隆琦は退隱し、一山の事は高弟木菴性瑫禪師が主ることとなつた、隆琦の門下で高弟である木菴性瑫、即非如一の二人は對立の狀があつた様であるが、木菴が黄檗山第二代となるとなつて、如一はすぐ山を下つた、それで木菴性瑫は一門の諸法弟を引率して、所謂守成の業を全うすることとなつた次第であるが、寛文の末に青木甲斐守の本願で、江戸の白金臺に一寺を開いて紫雲山瑞聖寺と號し、延寶の末に隱元隆琦禪師が寂せられて後、木菴性瑫は關東に下つて一門を構ふることとなつたから、黄檗宗の中心は自然に關東に遷ることとなつた、隱元、木菴相嗣いだが、黄檗宗の形勢は此年間に變なこととなつた様である、

る、即ち第二の黄檗山である紫雲山瑞聖寺の榮へることとなつた、黄檗、紫雲の兩山に三壇戒場を設けることになり、兩山對立の狀であつたが、實際一宗の中心は紫雲山にあつた様で、木菴性瑫門下の三傑と云はる、鐵牛性機、慧極道明、潮音道海は共に關東に下り、鐵牛は相模の紹泰寺を開き、次に向島の弘福寺を開くこととなり、潮音は猿江の廣濟寺を開くこととなり、十哲の一人なる鐵眼道光も亦、關東に下つて相共に一家の興隆事業に經營した、個様の次第で大に關東に盛大になつた、黄檗山には木菴の後慧林性機は僅に一年で退隱し、獨湛性瑩が山主となつたが、獨湛は淨土教に意を傾けて念佛誦經を事としてゐた様であるから、益衰微した様である、元祿五年の事である、高泉性徹が第五代の山主となつて稍面目を新にした、高泉は博學多才で抜目のない人であつた様である、支那人でありながら扶桑禪林、僧寶傳、續扶桑禪林僧寶傳、東國高僧傳等を作つた其洗雲集を見ても人柄が判る、一方には靈元上皇の御歸依を蒙り、他の一方には將軍綱吉の尊敬を受けて居られた様である、然し門下には了翁道覺一人が聞てゐるばかりである、門下は寂寞たる狀況であつたから、其後黄檗山は再び興ることなく、漸次に衰微する事となつた様である、

臨濟、曹洞、黄檗の三宗が對立することになつていつれも其宗風が異つてゐる、就中黄檗宗が一異彩を放つたは事實である、當時支那には、坐禪念佛一味の説が盛に行はれてゐたが、隱元隆琦以下の諸禪師は此説を傳へた様である、獨湛性瑩は大に念佛を鼓吹し、扶桑往生傳を作つたが、自ら一宗の風をなした様である、臨濟宗の夢窓疎石が念佛を排撃したとは、黑白の相異である、

黄檗宗が渡つたについて、其影響は種々の方面に認めらるゝ様である、隱元西來に伴うて獨立性易等の文人も來たから、詩、文、書、畫等に關係する事實もあはれ、然し是等の事實は話す邊もないから略してあか

當時曹洞宗の形勢が如何であるかと云ふに、臨濟宗が關東に興つた様に、同じく關東に興つたは事實で、實際關東に中心が遷つた様である、關東三ヶ寺即ち下總の總寧寺、武藏の龍穩寺、下野の大中寺が興り、次に江戸三ヶ寺即ち總泉寺、青松寺、泉岳寺が興つて一宗の形勢が一變した様であるが、内部には伽藍相續の弊害が盛であつた、元祿の頃である月舟宗胡、円山道白等の諸禪師が出て弊害を打撃する様になつて、大に活氣を帯びたが、月舟宗胡等の改革は宗門の大事であつた、諸君は十分承知の事でありませう、復古志等に其顛末の書が傳つてあるから、今茲に委しく話す必要もなからうと思ひます、

只此改革が隱然黄檗宗の興隆に刺戟せられた様であるは、如何にも事實であらうと思はれます、延寶五年に明の心越興禪師が西來したのも、大に宗門興隆の媒となつた様である、

第七三宗持續の時代

第七三宗持續の時代と云ふは、中御門天皇の朝の初から、大凡九十餘年の間を假に稱する次第である、

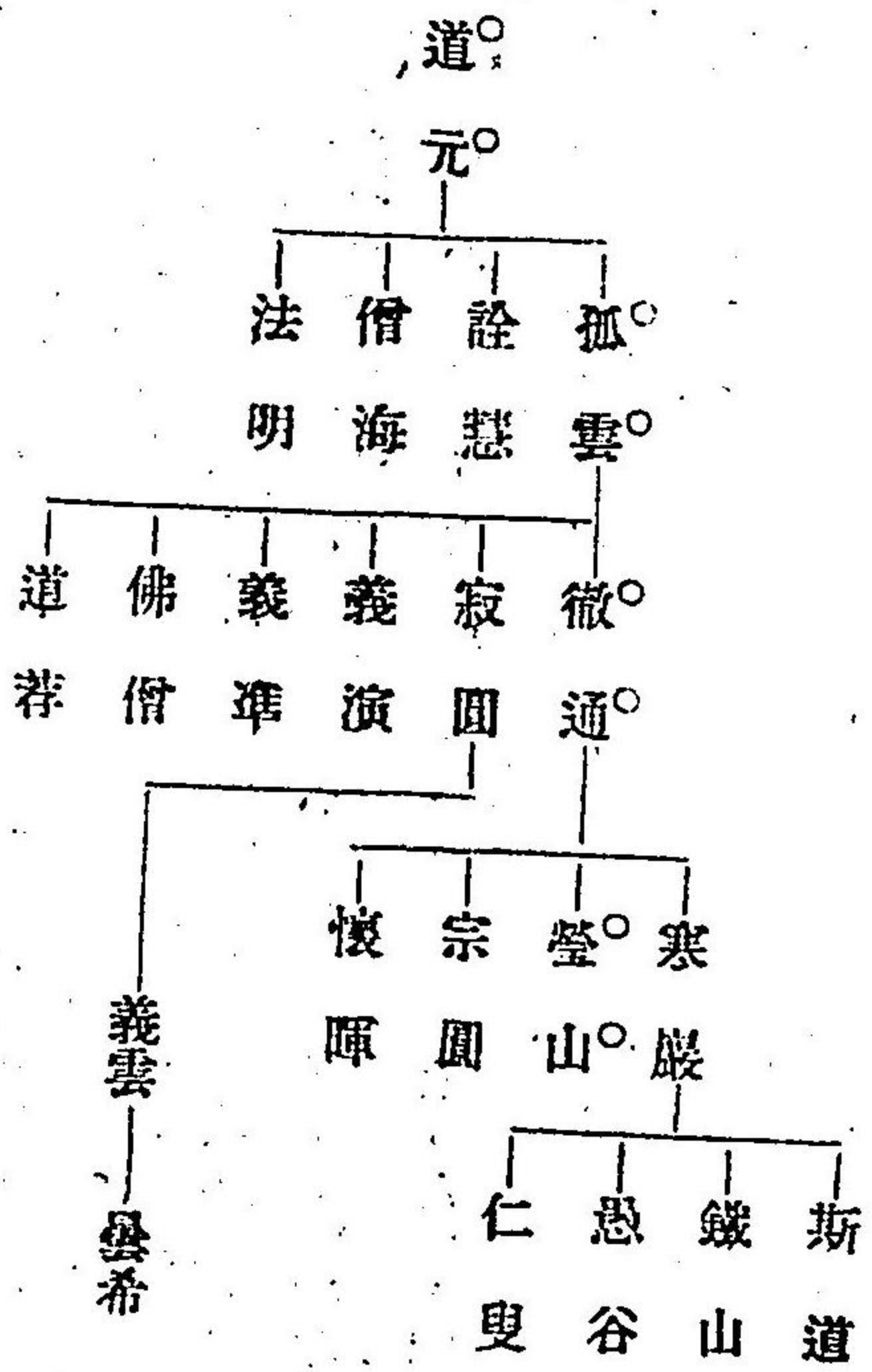
臨濟宗には白隱慧鶴、古月禪材の二大徳が出てられ、就中白隱慧鶴の下から大に、興隆することゝなつた、東嶺圓慈、峩山慈掉等の輩出するゝなり、一宗の新局面を見るときとなつた、

曹洞宗には天桂傳尊禪師が出でられ、其下が大に興隆し指月慧印、豁道本光、面山瑞芳等の諸禪師が出られて、これ亦一宗の新局面を見るときゝなつた、

黄檗宗には大禪師は出なかつた、龍統道棟が本邦人で、始めて黄檗山第十四代の山主になつたが、別段に言ふほどの事實もなかつた、其後良忠如隆が稍聞へてゐるが、一宗の衰微を如何ともすると、出来なかつた様である、

第七三宗持續の時代の形勢は、今日三宗の形勢に連続してゐる次第であるが、三宗の老宿が眼前の事實の様に諒知してゐることであつて、私が未熟の觀察を話すは、興味のないことであらうから、斷然略して置きます、諸君が諸老宿から親しく聞取られたる事實は、却て私が承りたいと思ふところでありませう、相共に協力して、歴史の研究を積みたい考であります、

○曹洞宗法脈相承 (補遺)



禪宗史要 終

明治三十五年六月十五日印刷
明治三十五年六月十八日發行

夏期講演集分本

編輯者

曹洞宗 夏期講習會

右代表者

峯 玄 光

發行者

今 村 金 次 郎

印刷者

青 木 弘

印刷所

株式會社 秀 英 舍
東京市京橋區四紺屋町二十六七番地
東京市芝區露月町十八番地

不許複製

發行所

東京市芝區露月町十八番地

鴻 盟 社

(電話新橋三〇二七番)

